

静岡県 掛川市

## 『松ヶ岡プロジェクト』の背景と構想



平成 26 年 9 月

## 目 次

1	山崎家と「松ヶ岡」の由来・・・・・・・・・・	1
2	建築としての歴史的意義・・・・・・・・・・	2
3	社会経済の歴史から見た意義・・・・・・・・	2
4	地域経済の近代化のためのインフラ整備・・・・・・・・	3
5	掛川銀行の創立と役割・・・・・・・・・・	3
6	日本の金融貨幣論への貢献・・・・・・・・	3
7	修復・復元・活用の構想・・・・・・・・・・	4

『松ヶ岡プロジェクト』では、江戸末期の文化財として価値のある「松ヶ岡」を修復するとともに、明治初年の近代産業金融の幕開けを印す旧「掛川銀行」の本店建物を復元します。これにより、「松ヶ岡」から輩出し、地域と国全体の経済社会の近代化に大きな足跡を残した二人の人物について学び、現在及び将来の世代が彼らの発信するメッセージに耳を傾けられるようにすることには大きな意義があると確信いたします。皆様方には本プロジェクトの趣旨をご理解をいただき、その実現に対してできる限り多くのご支援をお願いいたします。



## 1 山崎家と「松ヶ岡」の由来

山崎家は、1700年代半ば掛川藩の周辺村落部（旧伊達方村）の旧家から分家した。初代万右衛門は、油商を営んで成功し、間もなく掛川城下の西町に居を移し、油に加えて、ろうそくなどの商品を手広く商い、その後の家運隆盛の基礎を築いた。

山崎家では、3代以前の早くから藩の必要とする物資の御用達商人に指名され、4代には、その実績のうえに、身分的にも苗字帯刀を許され、藩政に関わるようになった。5代からは、代々の当主が商品経済の発展に応じて、地域の特産品（葛布）の問屋業を営み、6代では新田開発などに乗り出し、それぞれ成功を収めた。また、6代では、藩の財政窮乏に伴い、金子御用達となり、その御用達先は掛川藩に止まらず、浜松など近隣諸藩や代官にも広がっていった。7代当主の時期に明治維新の変革があったが、山崎家当主は、この時旧藩の負債整理に参加することとなった。そして、旧藩への債権放棄の代償として、あるいは、手持資金の投資により広く近隣の田畑を手に入れたほか、三方原・遠州奥山、大井川上流、伊豆天城の各地の森林を取得し、静岡県下有数の富豪と言われるようになった。

なお、現在の旧山崎家住宅は、6代当主が西町から移転し、1856年（安政3年）に建造したものであり、この土地に多くの赤松が立っていたことから、「松ヶ岡」と呼ばれることとなった。また、8代千三郎が当主であった1878年（明治11年）明治天皇の北陸東海御巡行があった際には、松ヶ岡山崎家住宅は天皇<sup>あんざいしよ</sup>に行在所として提供された。

（資料 1.「松ヶ岡（山崎家）の足跡」家系図）



## 2 建築としての歴史的意義

松ヶ岡（旧山崎家住宅）は、敷地面積 5,302.16 m<sup>2</sup>、建物（9 棟合計）面積 1,157.45 m<sup>2</sup>（延べ床面積）である。これらは、主屋、長屋門、中門など、江戸末期 1856 年の建造時のまま残されており、当時建築材料がかなり広範囲に流通するようになった状況を反映し、いずれも厳選された第一級の材料をもって丁寧な細工により建造されている。なお部分的に、後世の改修が認められるが、その部分を撤去すれば、容易に当初の形に復元できるものである。

また、中門の奥には庭園があり、そこには、池、多数の灯籠、沓脱の鞍馬石などが見られる。また、「松ヶ岡」の呼称の起源となった多くの赤松も残り、それらが屋敷をとり巻く外濠周辺の高木ともども遠景からも識別できるほどの屋敷林を構成している。

このように、旧山崎家住宅は、建築庭園が全体として江戸末期の豪商の屋敷構えをほぼ原型のままに残していること、及び、明治天皇の行在所という歴史上の出来事のあった場の遺構でもあることから、大きな建築史的な意義をもつものである。



## 3 社会経済の歴史から見た意義

旧山崎家の歴史は、江戸中期以降の町人勢力が経済的実力を蓄積し、藩体制の中であって武家との勢力バランスを徐々に自己に優位にしていこう姿を示している。そして旧山崎家住宅は、明治維新で両者の力関係が最終的に逆転する僅か 12 年前に、江戸の藩政がなお続く中で町人の実力を誇示するかのよう建造されたと見ることができる。別の言い方をすれば、旧山崎家住宅は日本の歴史の中で町人＝市民が優位に立つ近代化の幕開けの象徴としての意義をもつとすることができる。



#### 4 地域経済の近代化のためのインフラ整備

山崎家 8 代千三郎は、自宅を天皇の行在所として提供したことによって、武家にとって代わって公共的役割を果たす地方のリーダーとなる準備を整えたと言える。千三郎はその後、公共性の高い分野で際立った活動を展開した。1889 年（明治 22 年）の初代掛川町長に就任した前後を通して、1881 年（明治 14 年）には茶再生工場の建設、1887 年（明治 20 年）には森・掛川街道の開設、1888 年（明治 21 年）には大井川疎水の計画・測量、1892 年（明治 25 年）には青田坂トンネルの掘削、1893 年（明治 26 年）には掛川鉄道設立など、立て続けに地域の殖産興業のための物的インフラの整備にリーダーシップを取り、多くの私財も投じた。

#### 5 掛川銀行の創立と役割

千三郎はまた、物的インフラの整備とともに、金融というソフトのインフラ整備にも取り組んだ。すなわち地方の経済発展、特に茶をはじめとする地場の産業からの資金需要に応じること、また、地方で官金を取り扱う銀行が必要なこと、さらに、世界に茶産業を広めるため外国為替などの取り引きができる銀行が必要なことから、千三郎は 1880 年（明治 13 年）に掛川銀行を設立し、自らが初代頭取となった。

当時、静岡県内には静岡三十五銀行、浜松二十八銀行がすでに設立されていたが、掛川では、国立銀行の称号をもつ銀行の設立期限に間に合わなかったため、「掛川銀行」の名称での設立となった。しかし掛川銀行の資本金は千三郎らの努力によって 30 万円に上った。これは三十五銀行の 7 万円、二十八銀行の 12 万円を遥かにしのぎ、全国有数の大銀行となった。千三郎たちの地域経済の発展にかける並々ならぬ熱意とそれを裏付ける経済的実力が備わっていたことを示すものであった。



山崎千三郎



山崎覚次郎

#### 6 日本の金融貨幣論への貢献

山崎覚次郎は、千三郎の甥にあたり 1868 年（明治元年）6 月に、山崎家 7 代徳次郎の長男として生まれた。覚次郎は、のちに京都帝国大学総長や文部大臣などを歴任した岡田良平や、のちに文部大臣や宮内大臣などを歴任した一木喜徳郎とともに、<sup>き ぼく がく しゃ</sup> 冀北学舎（掛川市倉真にあった私塾）で学び、「冀北三羽ガラス」と評された。

1889 年（明治 22 年）に、帝国大学法科大学政治学科を卒業し、1891 年（明治 24 年）に、ドイツへ留学した。1906 年（明治 39 年）には東京帝国

大学法科大学の教授に、1919年（大正8年）東京帝国大学経済学部が作られるときは創立のメンバーとなり、1920年（大正9年）から1923年（大正12年）までは、第二代の経済学部長を務めた。

覚次郎の講義科目は貨幣論と銀行論であり、研究では特に貨幣の価値や貨幣制度の研究に力を注いだ。当時わが国の金融は未だ揺籃期にあり、にもかかわらずこれを学者としての専門分野としたのには特別な理由があった。叔父千三郎が掛川銀行の設立を主導し、その経営に当たったこと、及び、覚次郎自身が千三郎の死去後一時同行の取締役となったことである。そのみならず、覚次郎自身が「自分は金融の研究よりも、金融業界で働くことに興味があった」と回顧しているほどであった。しかし、覚次郎の現実の活動はあくまでも金融論、貨幣論の研究にあり、その成果を敢えて概括すれば、当時の日本が金本位制のもとにあったにもかかわらず、金本位は単なる名目でしかないとの主張を展開し、現在の管理通貨制度への途を拓く役割を果たしたということであろう。

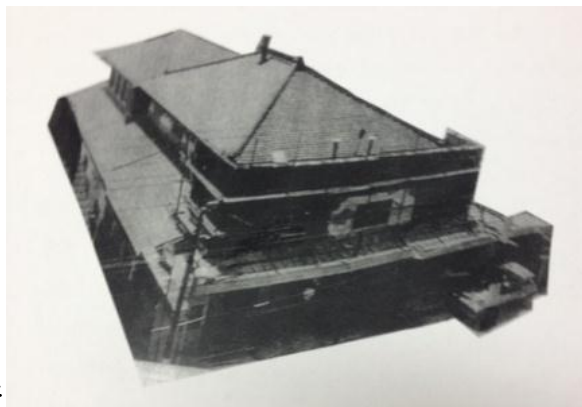
このように千三郎は地方にあって、その社会経済の近代化に多大な貢献を果たし、覚次郎は中央の学界に出て、日本における「金融論、貨幣論の先駆者」の途を歩んだ。旧山崎家住宅は、これら二人の人物を輩出した家としても、後世の人々から顧みられるべき価値をもつ文化財であると言える。

## 7 修復・復元・活用の構想

松ヶ岡（旧山崎家住宅）については、文化財として市、県、国の公式指定を受けるように働きかけを行い、後世に永く保存する。そのため、保存管理・修復計画等を早期に策定する必要がある。その計画に基づいて修復を行うとともに、設立時の掛川銀行の本店を復元する。こうした事業の主体は、「保存活用検討委員会」から発展移行した『松ヶ岡プロジェクト推進委員会』が担い、修復・復元の費用には、寄附金を募ることとする。

修復後の活用については、「土の掛川城、農の報徳社、町人の松ヶ岡」との位置づけのもと、掛川城、報徳社とともに、松ヶ岡も市民さらに広く全国民が日本の歴史を流れる精神の根幹を学ぶ場とし、「松ヶ岡」の歴史やそこに関わる人物に学び、将来を担う子どもを育てるための場とする。

また、復元した「掛川銀行」では、同行の歴史を展示するほか、金融等のセミナー教室や、シンポジウム会場、劇場など、学びや文化・教養を育む拠点として、多目的に活用する。その他、市民交流の場、来訪賓客のもてなしの場、観光スポットとしても活用する。



2代目 掛川銀行

# 資料編



## 資料編 目 次

資料 1 「松ヶ岡（山崎家）の足跡」家系図

資料 2 「旧山崎家住宅の調査報告（概要版）」東京藝術大学編

資料 3 「第 3 回保存活用検討委員会議事録（抜粋）」

資料 4 『掛川市史』

資料 5 「掛川銀行小史」関七郎氏 著

資料 6 『山崎覚次郎小伝』尾崎徳郎 著

資料 7 「金井先生を憶ふ」  
～『金井延の生涯と學跡』所収

資料 8 「山崎覚次郎の貨幣論～わが国ミカリストの先駆者」  
～『日本の経済学を築いた五十人－ノ・マルク経済学者の足跡』所収

資料 9 「山崎覚次郎博士追憶記念號」  
～『経済学論集』（第 15 巻第 5 号）1946 年

## 【松ヶ岡（山崎家）の足跡】

まん え も ん

## 初代 山崎万右衛門（宝暦5年(1755年没)）

- ・名：才兵衛。万右衛門に改め、襲名とする。
- ・伊達方村寺ヶ谷山崎弥左衛門より分家、掛川城下 西町に移り店舗を構えた。
- ・油商(油・ろうそく)を営み成功。
- ・通称「西万(にしまん)」
- ・掛川藩御用達(ごようたし)を務める家柄を築く。

## 2代 山崎万右衛門

- ・2代の頃から掛川藩の御用向を命じられていたとされる。

## 3代 山崎万右衛門

## 4代 山崎万右衛門（～1828）享年56歳

しんえん いぜんどう

- ・名：旭、号「晨園」、「以善堂」とも名乗った。
- ・掛川藩校教授 松崎慊堂(まつざきこうどう)と師弟・交遊関係があった。
- ・掛川藩御用達となり、5人扶持(ごにんぶち：5人分を雇えるだけの米が支給されること)を与えられる。名字帯刀を許され、藩政に参画。

## 5代 山崎万右衛門（～1831）享年25歳

- ・4代目長男 名：義一
- ・西町より十王町高屋敷に新店営業。葛布問屋として興隆。

## 6代 山崎万右衛門（～1866） 享年56歳 安政5年（1858）隠居

- ・5代目弟 名：知盈
- ・屋敷を西町から十王裏、旧瓦屋敷の地に移す。「松ヶ岡」と称される。
- ・掛川藩御用達として扶持加増(25人扶持)。藩より「御家来並右筆格」として士分待遇を受ける。藩政と財政両面に参与、新田開発を行う。
- ・掛川御三家筆頭。浜松、横須賀、相良、田中、吉田各藩、葦山代官等大名旗本の金子御用達を務めた。

とくじろう

## 7代 山崎徳次郎（1840～1900） 享年61歳 明治3年(1870年)隠居

- ・6代目長男
- ・維新変革に際し、旧藩負債整理に参与。同家の収入余剰を不動産に替える。近隣の田畑、三方原、大井川上流、遠州奥山、伊豆天城山等の山林買入れ、県下屈指の富豪となる。
- ・明治11～16年資産貸付所掛川分所頭取など務める。

かくじろう

## 山崎覚次郎（1868～1945）享年78歳

- ・徳次郎長男
- ・冀北学舎に学び、東京帝国大学卒業後、従兄弟の丘浅次郎と共にドイツ留学。
- ・日本の金融論、貨幣論の先駆的研究した経済学者。
- ・東京帝国大学名誉教授、東宮職御用係として皇室の国際金融問題顧問を務める。

せんざぶろう

## 8代 山崎千三郎（1856～1896）享年42歳

- ・6代目三男
- ・14歳の時、兄徳次郎隠居、8代目襲名。
- ・掛川銀行設立。初代頭取。
- ・掛川鉄道設立。東海道路線決定に尽力。大井川疎水計画など地方発展に貢献。

## 9代 山崎淳一郎（1883～1913）享年31歳

## 10代 山崎健太郎（1913～2008）享年96歳

## 11代 山崎良太郎（1941～ ）

- ・神奈川県茅ヶ崎市在住

## 旧山崎家住宅の調査報告（概要版）

## 1. 旧山崎家住宅の建造物概要

旧山崎家住宅は静岡県掛川市に所在する。山崎家は葛布問屋を営み、江戸末期に掛川藩の御用商人として活躍した。主屋は江戸末期の安政3年（棟札より）に建てられ、その他長屋門、米蔵、奥蔵、西藏、納屋、堀など江戸末期に造成されたと考えられる。明治11年の明治天皇巡幸では行在所となり、江戸期屋敷をそのまま使用し、主屋上之間を玉座とした。その後行在所としての格を保持しつつ、近代的な新座敷を整備した。

旧山崎家住宅の構成する建造物の概要は以下の通りである。（建築年代順）なお、特に重要となる主屋に関しては次項で詳細を紹介する。

棟名	構造形式	建築年代	備考
主屋	木造平屋建、一部二階付、桁行 16.5m、梁間 13.7m、切妻造、棧瓦葺、四周庇付き、銅板葺、正面中央に式台付、南面。	安政3年	附属棟は明治期
長屋門	桁行 14.5m、梁間 3.6m、入母屋造、棧瓦葺、屋敷地の南辺東寄りに南面	江戸末期	附属屋解体
米蔵	土蔵造り、桁行 16.4m、梁間 4.5m、寄棟造、棧瓦葺、平入	江戸末期	北側は安政前か？
奥蔵	土蔵造り、桁行き 5.0m、梁間 4.1m、切妻造、棧瓦葺、南面、平入、一部二階建て	江戸末期	一部解体
西藏	土蔵造り、桁行 11.3m、梁間 4.9m、切妻造、棧瓦葺、平入	江戸末期	
納屋	木造平屋建、桁行 10.0m、梁間 3.9m、切妻造、棧瓦葺、平入	江戸末期	一部解体
便所・風呂棟	正面 7.9m、側面 8.5m、平屋建、寄棟造、棧瓦葺、接続部を除く三面に庇を廻し、檜皮葺（現状は銅板葺）	明治中期	明治11年以降
奥座敷	正面 11.8mm、側面 9.9m、寄棟造、棧瓦葺、雁行状に延びる渡り廊下付	明治中期	同上
二階屋	木造二階建、正面 8.5m、側面 5.7m、寄棟造、棧瓦葺	明治中期	二階は昭和前期
中門	南側5間、北側2間の真壁造りの堀で、その間に一間棟門の中門が建つ	明治中期	
北蔵	土蔵造、桁行 13.6m、梁間 6.3m、寄棟造、棧瓦葺、平入	昭和前期	
味噌蔵	土蔵造、桁行 7.2m、梁間 4.5m、切妻造、棧瓦葺、平入	昭和前期	
金庫蔵	鉄筋コンクリート造、平屋建、正面 3.3m、側面 2.2m、陸屋根	昭和前期	



## 主屋

**概要** 木造平屋建、一部二階付、桁行 16.5m、梁間 13.7m、切妻造、棧瓦葺、四周庇付き、銅板葺、正面中央に式台付、南面。東半を土間、西半を居住部とする。床上部は三列で部屋を割りつけた構成で、その南中央に式台玄関を設け、一間幅の畳廊下を南面から西面にかけて矩形に廻す。土間部は、間仕切りを変更、床敷き、天井設置などの改造があるが当初は南面一間に庇を葺き放しとして、床上部側を通り土間とする。正面側の 12 畳と土間入口の上部は二階をつくり使用人部屋としていた。今調査では、土間側棟木下面に和釘二本にて打ち付けられた棟札を発見し、安政三年築が判明した。

**平面** 間取り東西で分けることができ、便宜上、西側を床上部、東側を土間側とする。床上部は部屋を三列三間設け、一間をほぼ六尺とする柱割で計画される。上手表側から、次の間、表座敷、小座敷、広縁と続き、表座敷、次の間に広縁を設ける。中手は十畳間、八畳間、仏間を並べ十畳前方に取次、式台を設ける。下手は、当初二室に分けていたが、現在は、居間、新座敷、物置を並べる。土間部は、後世の改造が多く、表側に玄関、作業場を二室、物置、便所、洗面所、風呂を配し、裏は食堂、台所を並べる。

**軸組** 基礎は自然石とし、地覆をまわしている。柱はすべて目の詰まった桧材で角柱である。土間境には一尺一寸と長大な大黒柱を建てる。各室の柱は、座敷廻りで一三〇mm、八畳間、仏間、茶の間西列に及び土間部主要柱は一七五mmである。

安政三年（一八五六）と年代が明確な大規模民家として評価できる。重要文化財の黒田家住宅主屋と類似点もあるが、平面構成や架構には独自性がみられる。これに対して、土間部は天井全前面に設けられているが、ほとんどが後世の設置で後補の床と併せて撤去すると、壮大な梁組をみることができる。東側面は便所、風呂の新設などあるが、当初の形式に復旧することは可能である。また、小屋組はたいへん興味深く、土間部と床上部で架構を変えている。土間部は三段に梁を組が、床上部は二段に梁を組み、その上を束と貫だけで小屋を組み、要所には筋違風の斜材を付ける。このあたりは、安政地震後の構法の工夫、耐震対策と考えられる。

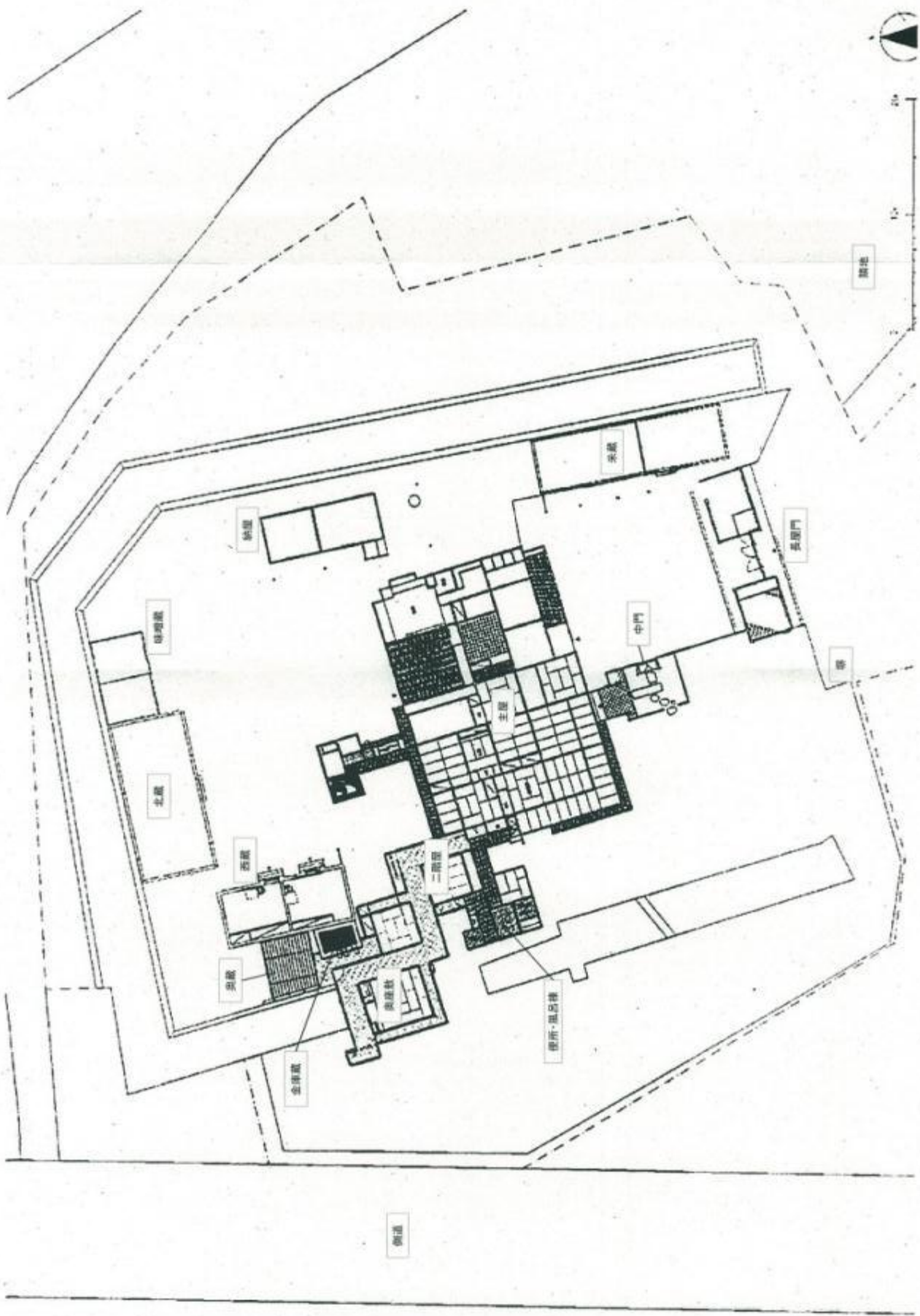
## 2. 文化財価値の考察

これ等の建造物群で構成される旧山崎家の文化財価値は次のものが考えられる。A 江戸末期の良質な主屋をはじめとする屋敷構えをよく残し、安政の地震後の建築として、構造的に工夫を凝らした住宅としての価値。B 近代以降の増築部は、桧材を用い格式高く設え、良質な空間のとしての価値の二点が考えられる。

A は、江戸末期に造営された建物群である、主屋、長屋門が中心となり、屋敷構えを構成する米蔵、奥蔵、西蔵、納屋が該当する。またそれに付随し、堀で囲まれた土地もその価値を有すると考えられる。特に主屋は、安政地震以後の建築で、床上部座敷廻の間どりや小屋組に特徴がみられる。

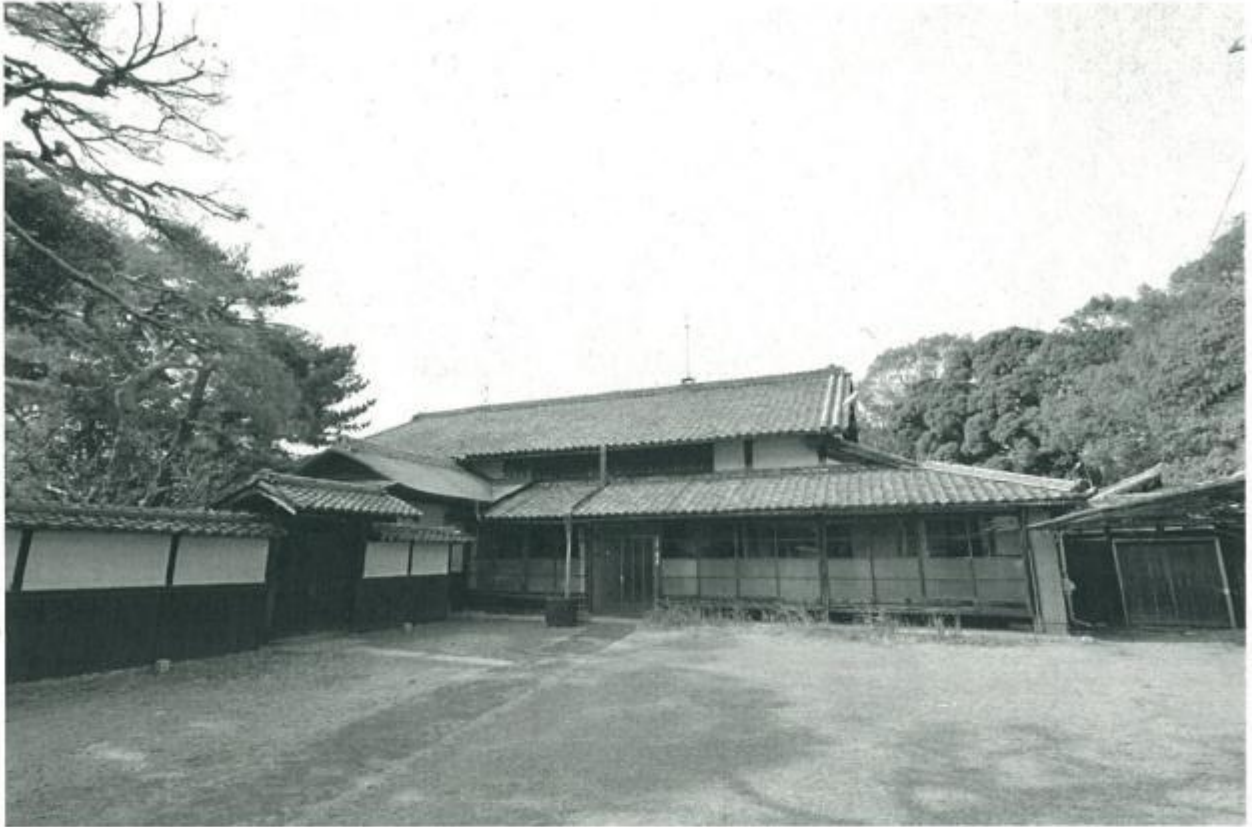
B では、A をふまえ近代以降の造営を積極的に評価し、奥座敷、風呂便所棟、二階屋一階部分が該当する。なお、敷地西側の庭園部は検討を要する。

昭和期と判断した二階屋の二階部分、北蔵、味噌蔵、金庫蔵は、現状を維持しつつ、積極的な活用が望まれる。但し、金庫蔵に関しては、後世の増築部で、屋根の納まり等に無理が生じ、雨漏り原因となっている。歴史的価値を有しているが、根本的な対処が必要と考えられる。



## 写真編

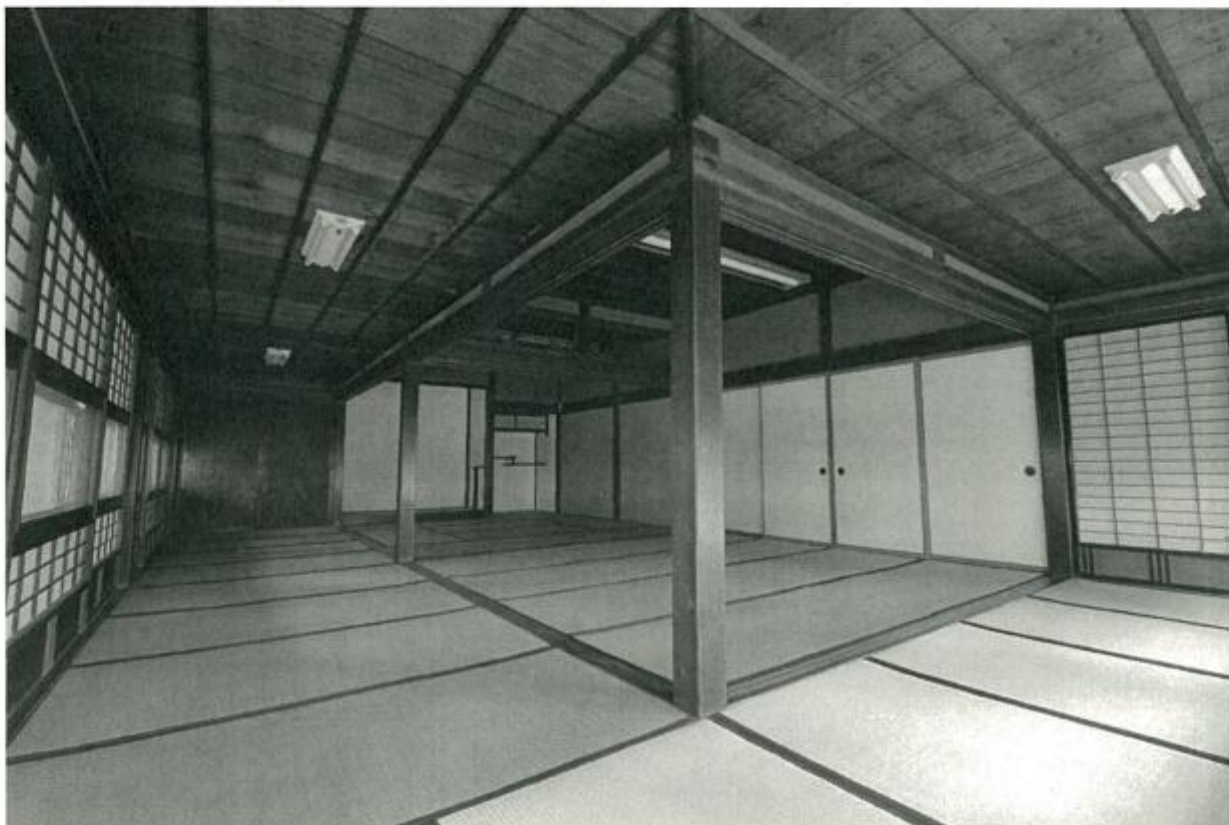




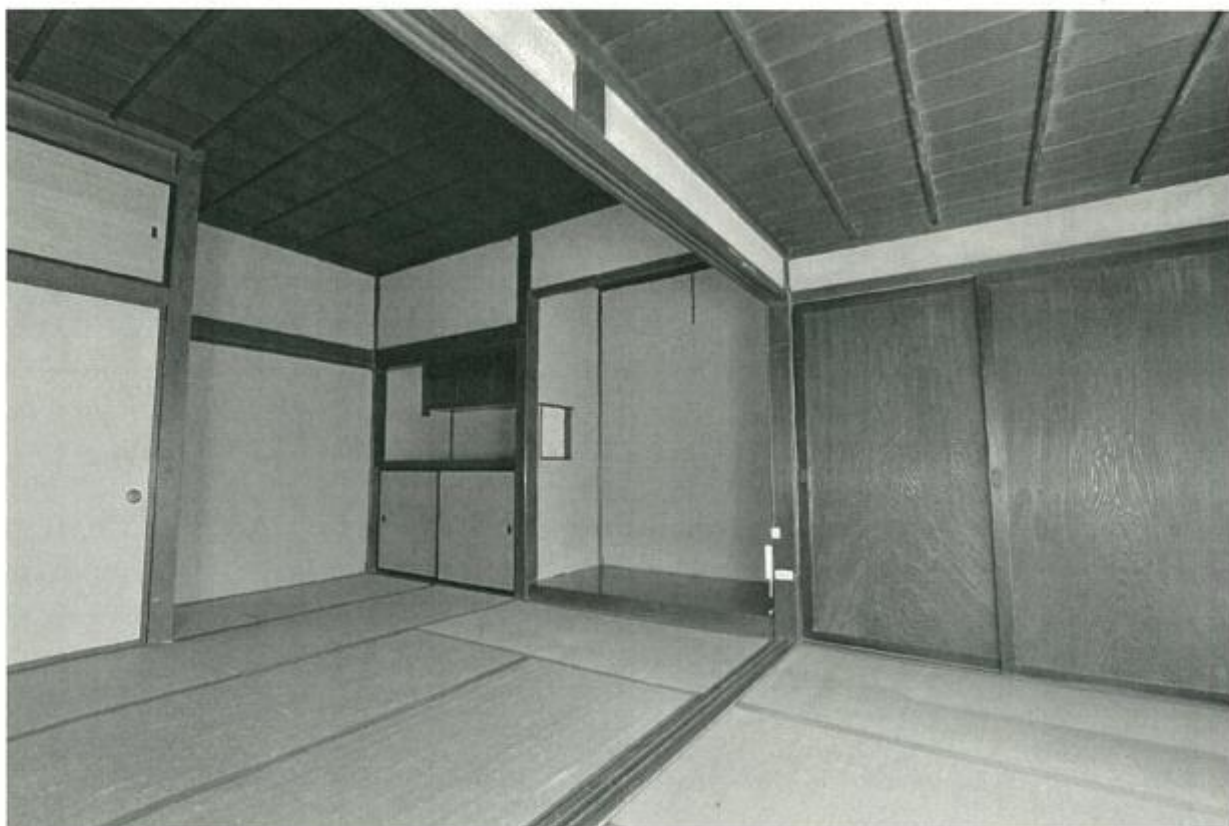
1. 旧山崎家住宅主屋（南より）



2. 旧山崎家住宅主屋全景（南西より）

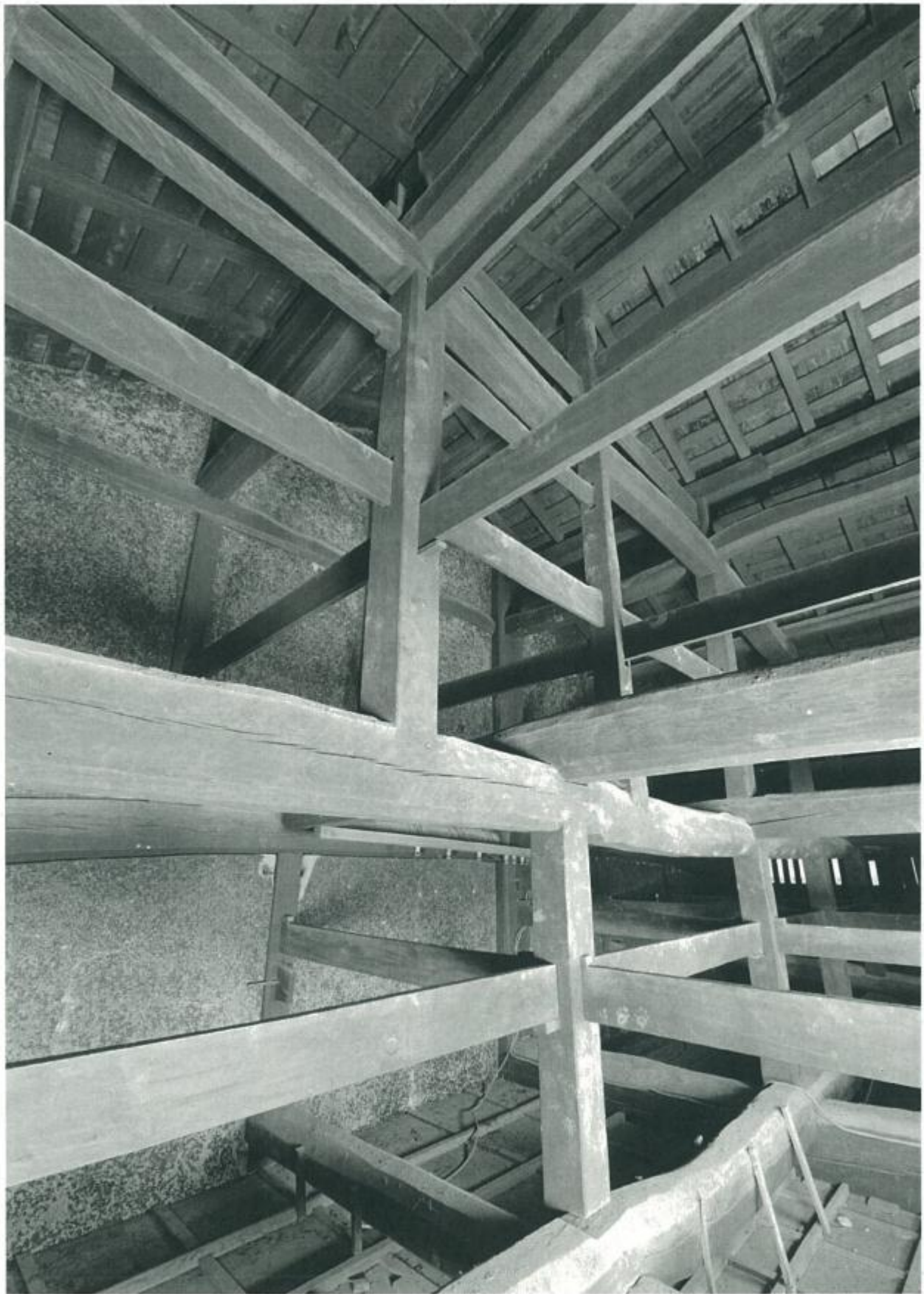


3. 旧山崎家住宅主屋座敷及び広縁（南西より）



4. 旧山崎家住宅主屋奥座敷（北東より）

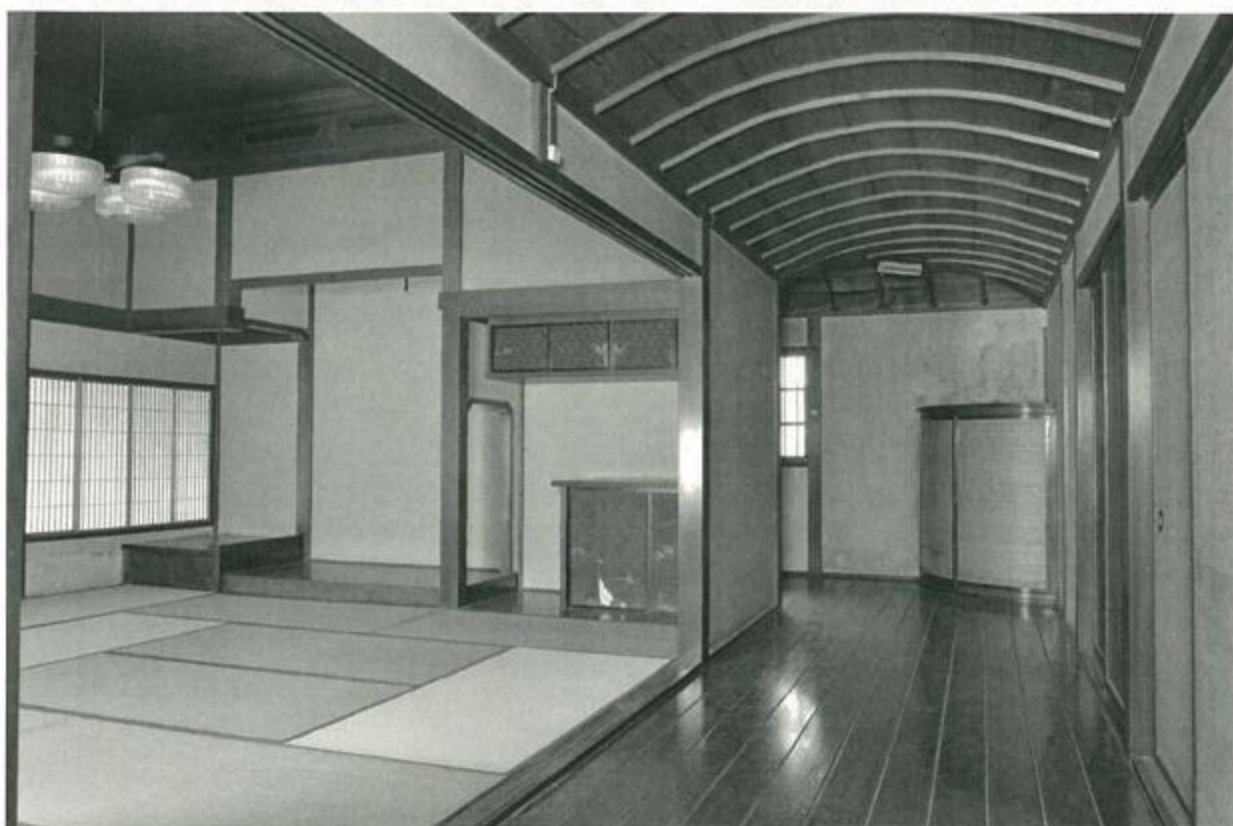




5. 旧山崎家住宅主屋土間側小屋組（南東より）



6. 旧山崎家住宅新座敷（西より）



7. 旧山崎家住宅新座敷及び廊下





8. 旧山崎家住宅長屋門（南より）



9. 旧山崎家住宅風呂・便所棟（北西より）



10. 旧山崎家住宅風呂・洗面内観（東より）



11. 旧山崎家住宅東側堀及び米蔵（南東より）





12. 旧山崎家住宅主屋棟札

## 第3回委員会 議事録（抜粋）

◎名 称	第3回 松ヶ岡保存活用検討委員会
◎日 時	平成25年10月20日（日）9：30～11：20まで
◎場 所	松ヶ岡（旧 山崎家住宅）
◎内 容	理念について

- 文化財として、江戸末期の建物であり明治天皇がおいでになられたことを含めて、千三郎氏や覚次郎氏が大活躍したことも加えて後代に伝えていく。こういうことが理念だと。
- そのエピソードが50年も経ったときに、掛川の歴史に加わるような体制にしてもらえたらと思う。
- 掛川で松ヶ岡はどういう存在なのか。武家文化のお城に対して、松ヶ岡は明治以降、近代化していく中での掛川の町人文化の頂点ではないか。それまではお城を中心とした武家文化の時代である。明治以降、市民が富を得て実権を握っていく。その象徴が松ヶ岡である。武家文化のお城は残るけども、町人文化というのは失われてしまうのではないかと思っていたので、松ヶ岡が残されるのはとてもうれしい。こういう文化があったんだということも継承して、若い人が学んでくれたら。
- この松ヶ岡が掛川城と対比していることはアピールすべき。そこから千三郎氏の活動は出てくるし、掛川銀行も出てくるし、それを土台にして覚次郎氏が出る。日本の金融の一番初め、土台を作った人である。なぜ覚次郎氏は金融に興味を持ったのか、町人として葛布だとかお茶だとか商品的な農産物を扱う街だからこそ、金融に関心を持ってそういう分野へ進んだと思う。そんなところをアピールしないといけない。
- 「以善堂」よいことをする家、ここからいい人が旅立っていく、と。ここは落ち着くことができ、穏やかな自分がある特別の空間。人材育成の場としたらどうか。いかに多くの人に足を運んでいただくかがキーポイント。足を踏み入れられないところに踏み入れることができたことに感動した。明治の姿で保存して、ここで人材教育を行える、千三郎氏や覚次郎氏のわかりやすい伝え方が必要だろう。小学生でもわかる千三郎氏・覚次郎氏の生き様をもとに、これから掛川人としてどう生きていくんだというきっかけ作りの場所になればいいと考えている。
- 掛川銀行の本店はどこにあったのだろうか。そこの頭取になって市中金融の方にいったのが千三郎氏で、他方で組合金融の方にいったのが岡田良一郎氏。千三郎氏の掛川銀行に覚次郎氏が勤めている。だから実際の現場をよく知っている。ただ理屈ばかり考えたのではないだろう。
- アピールするのに、子どもたちにどのように教えていくのか。過去の館とされてはいけない。信念のある人を育てたいのか、覚次郎氏のような人を育てたいのか、焦点のあった人材育成の場としたい。
- 上記の言葉が大事で、位置づけることができると思い知らされた。さらに、掛川城と報徳社と松ヶ岡の関係で捉えると、松ヶ岡は不可欠。掛川の文化、この地域の文化、さらには日本の縮図だと思う。日本文化の基底は江戸時代から明治にかけて、三角形で日本人ができていると思う。



# 掛川市史

下卷

ていた。「生糸製造会社規則」(遠江國豊田郡深見村成業社)によれば、「明治十一年伊藤七郎平始養蚕者十有五名同心シテ生糸五人繰ノ小器械ヲ製造シ名ヲ成業社ト称シ各家ノ成繭ヲ集メ製糸ヲ試ミ尋テ十二年ニ至ル。然共吾地方タル蚕業未開ニシテ其成繭微ナリ。故ニ今度一層有志ヲ募リ、無尽蔵社ノ分社ト成左ニ社則テ改良シ連年盛大ニ至リ国益ノ一助タランヲ希望ス」というのが、農学無尽蔵社分社として明治一三年に成業社が成立する経緯であった。上位株主には、戸田元八郎、岡田良一郎、山崎千三郎、松本文治、島居半次郎が含まれており、明治一三年から一五年にかけて、掛川の有力資産家、地主たちは製糸業への投資にも積極的であった。しかし、松方デフレを経て製糸場の経営はあまり振わなかったと推測される。明治一八年には農学社製糸場の株主の一部が株金の払い込みに応じないことを理由に訴訟が起こされた。インフレによって加速された「産業化」の時代は終わりを告げ、掛川の有力資産家、地主たちは工業投資への意欲が薄れていた。

#### 十 資産金貸附所と掛川銀行

浜松県は明治六年十一月二四日に資産金貸附所の規則を布達した。貸附所の本社は浜松に置かれ分社が掛川と中京に設置され、殖産興業のための資金を供給することが目的であった。この貸附所は岡田良一郎が明治六年八月に提出した無償金貸附所設立の建議が実現したものといわれる。資産金貸附所の原資は地主豪農の献納金、貯穀の売却代金などからなっており、運営は浜松県租税課勸業係の監督下で地主豪農たちが御用掛として貸付事務に当たった。初期の資金運用先は、河川氾濫によって打撃を受けた村の救済をはじめ、産業所への貸し付けなどがあった。

明治一〇年末になって浜松本社の株主たちは浜松第二十八国立銀行の設立資金に充てるため、貸附所株金の下戻しを要求した。株金の三〇%が減少するという経営危機を乗り切るため明治一一年四月、岡田が総括に就任し経営改革に着手した。貸附所の株金に掛川分社の株主たちの比重が高くなり、また、岡田が明治一二年一月、分社内設置した勸業資金組合への大口加入者も掛川周辺の地主豪農であった。勸業資金は、溜池、用悪水路、堤防など農業基盤整備への貸し付けがその中心であり、早魃が多く溜池かんがい依存する佐野、城東郡におい



掛川銀行

て水利改善の低利資金を供給する重要な役割を果たした(加藤謙三「遠江國資産金貸附所」)。また、従来からの別途積立金の運用先は、岡田らが設立した遠州紡績への貸し付け、道路、溜池、堤防など基盤整備への貸し付けが大きかった。

明治一四年以降、資産金貸附所は新たな変化を迎える。同年の県会は資産金貸附所に対し普通の会社と同等に地方税を課することを決議した。さらに県は貯穀の売却代金などからなる公有金の還付を指示し、岡田は明治一七年になって一部の還付に応じた(無題「等」)。窮乏当初、県の勸業政策を推進する役割を担った資産金貸附所は、明治一〇年代前半には岡田の経営のもとで、掛川地域の地主豪農たちの事業展開を支えるようになった。しかし、松方デフレ期に入るとその存在意義は失われつつあり、完全な「民営化」への道を歩むのである。

明治一三年一〇月に開業した掛川銀行は、目覚ましい「産業化」に伴う資金需要に

表2-25 掛川銀行・資産金貸附所の株主（明治13年）

株主	株主名	住所	掛川銀行	貸附金	資産（明治11年）	
					不動産	現金
山崎千三郎	南西郷村	株	300	2,000	60,000	200,000
松本治	掛川宿	円	200	2,200	30,000	100,000
島井半次郎	同上		100	500	15,000	30,000
岡田良一郎	倉真村		100	2,050	28,000	10,000
戸田元八郎	高御所村		100	750	40,000	40,000
鈴木九一郎	伊達方村		100	500	25,000	40,000
鈴木八郎	同上		100	500	15,000	15,000
山崎徳次郎	南西郷村		50	700	—	—
河井重藏	上張村		50	1,050	—	—
山崎百四郎	掛川宿		50	1,550	10,000	10,000
吉岡三三郎	吉岡村		50	—	—	—
伊藤三三郎	日坂村		30	—	—	—
鈴木四郎	伊達方村		23	—	—	—
松本三郎	掛川宿		—	50	—	—
小沢六郎	富部村		—	200	—	—
伊藤七郎	日坂村		—	200	12,000	15,000
山内十郎	掛川宿		—	300	10,000	10,000

出典：『殖産興業と郵政運動』118、119、145ページ  
注：佐野郡内の株主のみ。

応ずるため、掛川周辺の地主豪農によって設立された。この時期、掛川銀行の大株主と資産金貸附所の出資者の多くは重複していた（表2-25）。掛川銀行の資本金は三〇万円であり、遠州有数の銀行であった。当時の掛川周辺の地主商人たちの實力の大きさを示しているといえよう。

掛川銀行設立の主要な目的は製茶売買に伴う荷為替金融であった。同行の本店は掛川宿に置かれ、相良出張店（明治一四年四月）、島田出張店（一四年四月）、福島県三春出張店（一四年九月）、横浜出張店（一四年五月）、金谷出張店（一五年四月）、福島県二本松出張店（二〇年九月）、静岡支店（二年八月）と

いう支店、出張所を設置した。製茶金融に於ける相良、島田、金谷、静岡の各店と、製茶金融が減少する時期に余裕資金を製糸金融に振り向ける福島県の二店、そして両者を統合する横浜店という配置であった。

掛川地域の地主豪農は掛川銀行の設立によって多額の資金を調達する道が開かれた。松本文治（義一郎）、鈴木九一郎らは掛川銀行からの借入金をもとに他方では貸し付けを行い、松本家の場合には小作米の売上金よりも利子収入がはるかに大きい状況であった（『殖産興業と』）。もっとも、この地主豪農の掛川銀行への資金依存の大きさが、明治一八年に表面化する大口こげつきの要因になり、これをきっかけに

岡田良一郎が頭取に就任し同行の経営立て直しに取り組むことになった。

#### (4) 街道の整備と海運

##### ア 中山新道の開通

東海道はいうまでもなく東西交通の大動脈であったが、その道すじには車の利用の困難な隘路が残されていた。日坂と金谷の間の小夜中山周辺がそれであった。小夜中山の峠道を改修し、通行の便を図ろうと、金谷宿の杉本權蔵は明治五年頃より計画を立てていたが、資金不足のため実現に至らなかった（『中山新道』明治13年2月27日）。

明治一二年になって杉本權蔵は、安倍郡静岡片羽町の伏見忠七、伏見忠左



旧中山新道と道銭場跡地（金谷町菊川）



町	村	家 戸 数	人		学 校	寺	
			男	女		軒数	坪数
上内田村	大字板沢	102	279	248	1	77	2
	大字和田	22	55	62			4
	大字上内田	144	353	350			1
	大字子隣	24	53	40			1
	大字岩井寺	29	86	77			1
計		321	826	777	1	77	8
							199

出典：陸軍省事務局第一軍事課編『明治廿四年徴発物件一覧表』

ノ機関トナリ其指揮命令ヲ受ケ区内ニ関スル村長ノ事務ヲ補助執行スルモノトス」と規定されていたので、区は独立した自治団体ではなかったが、区管理の共有財産（郷落有財産）の独自性は認められ、その管理運営は区会の議決によるものとされたのである。

## (2) 掛川町の成立と南郷村との紛糾

### ア 掛川町の成立と南郷村との組合設立

町村制施行に伴い明治三二年四月一日に掛川町が成立した。佐野城東郡下では唯一の町制施行であった。掛川宿を中心に下俣町、十九首町、仁藤村、大池村の一部などをあわせて自治区を造成したもので、町村制第百一六条「数町村の事務を共同処分するため其協議に拠り監督官庁の許可を得て其町村の組合を設けることを得」の規定に基づき、南接する南郷村（南西郷、下俣、長谷、上俣、杉谷、結縁寺の旧六か村が合併。なお亀田村は一九年一〇月一四日南西郷に合併された）と町村組合を設立した。町村役場の位置は当初、掛川町字紺屋町掛川病院境内に置き、翌三三年一月二八日には掛川町字研屋町裏字南西郷字三ノ坪五四一の二に移転している。初代町村長は大字南西郷の大地

町	村	家 戸 数	人		学 校	寺	
			男	女		軒数	坪数
倉真村	計	275	782	768	1	18	2
		360	950	988	2	563	8
西山口村	大字成滝	56	133	154	1	65	1
	大字葛川	98	239	230			1
	大字蘭ヶ谷	44	102	104			1
	大字印内	13	34	35			6
	大字宮脇	52	117	132			
	大字安養寺	13	36	30			1
	大字満水	93	250	242			2
計		369	911	927	1	65	5
東山村	計	100	304	271			2
		185	528	500	1	43	3
日坂村	大字日坂	74	225	212			2
	大字大野	37	98	98			1
計		296	851	810	1	43	6
東山口村	大字千羽	90	229	239			1
	大字逆川	42	125	125			
	大字小原子	10	23	30			
	大字八坂	123	304	328			1
	大字本所	48	123	136			15
	大字伊達方	93	229	271	1	72	1
	計	406	1,033	1,129	1	72	3
原泉村	大字大和田	50	141	146			1
	大字萩間	45	135	120			1
	大字丹間	22	61	63			45
	大字孕石	15	41	40			1
	大字居尻	36	105	99	1	12	1
	大字黒俣	29	96	87			36
	大字炭焼	32	120	99	1	12	25
計		229	699	654	2	24	4
							144



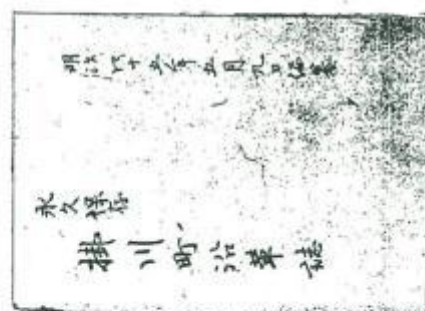
主山崎十三郎、助役は戸塚要作であったが、二二年九月に事務繁忙のため助役を一名増員することとし、榎本与次平が選出された。収入役には村松新八郎が選任されている。

新設掛川の戸数は一三二六戸、南郷村は四三四戸であった。現在の掛川市域は、このとき一町一七か村であり、総戸数は約七〇〇〇戸だったので、掛川町はその二〇%近くを占め、中核的市街地としての町制施行であったが、全県的にみると決して規模が大きなものであったとはいえない。市制を施行した静岡市の約八〇〇〇戸は別格としても、敷知郡浜松町は約二八〇〇戸、駿東郡沼津町・富士郡大宮町・志太郡島田町は一八〇〇戸台、榛原郡相良町と川崎町は一五〇〇戸台、そして磐田郡見付町と志太郡藤枝町は一四〇〇戸台であり、戸数で見ると掛川町は第一〇位の規模、遠州地方でも第五位、東遠地域でも相良町や川崎町に劣ることになった。もちろん、単純に戸数のみで推し量ることはできないが、東遠の中心として静岡、浜松、沼津に伍する位置を占めてきた掛川の町勢に問題を投げかけたことは否定できない。

反別・地価は約一〇〇町歩・四万円で、町域は先の戸数上位九市町より小さい。宅地反別最高地価で見ると、庵原郡江尻町の九〇〇円を筆頭にして掛川町は一三〇円で第七位である(明治三十四年調査)。かつての掛川藩城下、宿場町で商業も栄え郡役所はじめ官公署、学校、病院などが立地した掛川町は県下有数の市街地であったが、その広がりには欠けていたのである。町村制施行準備過程で合併が問題になった南郷村を合わせると戸数は一七六〇戸となり県下第六位、遠州では浜松に次いで第二位となる。南郷村の反別・地価は約六〇〇町歩・一七万円で、耕地の反別最高地価で見ると、南郷村は江尻町の一三〇円に次ぐ一二六円で、県下第二位であった(同前)。

掛川の四方には南郷村はじめ豊かな農村部が広がっていたのである。また、第二章で紹介したように、明治初年の掛川をややオーバーとはいえ、イギリスのロンドンやアメリカのニューヨークに擬してその活況ぶりを誇らしげに語るなど、県下有数の中核市街地として自負するところもあったほどであるが、市街地と農村部の円満な提携関係、あるいは掛川町が周辺農村部を吸引して市街地を拡張する集積度において欠けるうらみが、町村制施行時においてみられるのである。

この点で、掛川町と南郷村の境界整理ならびに合併問題をめぐる紛糾は掛川の発展に大きな傷根を残したといえよう。明治二年、町村制施行の自治区造成過程で、掛川宿・下俣町・十九首町・仁藤村をもって掛川町を形成するだけでなく、南西郷村・下俣村との地盤が大牙相錯わり境界がすこぶる混雑している状況を改善するため、双方の飛地交換による境界整理が検討された。そのうち、郡長はじめ有力者のあいだでは、掛川町域を南西



「掛川町沿革誌」

郷村、下俣村、杉谷村、上張村、結縁寺村まで、さらには長谷村、大池村まで拡張して有力なる一大自治区を造成することも企図されたのであったが(本報昭和四十二年十月二日)、境界整理、一大合併案ともに合意に至らず、結局、掛川町と南郷村が町村組合を結成することで折り合うことになったのである。

しかも、この町村組合の運営をめぐる、町村制施行当初より深刻な紛糾が生じている。すなわち、町村組合設置にあたって

（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎
（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎	（株）小島金七	（株）宮崎藤治郎

掛川米穀製茶取引所の仲買人  
（『掛川商報』明治27年10月24日）

れるとともに、地方的米穀市場を基盤とした取引所が主要都市で次々と設立され、掛川の取引所設立もそうした動きのひとつであった。しかし、これらの取引所の業績は振わなかった。表3-29のように掛川の売買高は減少し、静岡米穀取引所の売買高も同様の傾向を示した。明治三一年の米価上昇によっても掛川の売買高は回復しなかった。東海道線の開通は掛川の米穀集散地としての地位を高めたが、一方で東京など大都市米市場との距離を縮め、また、掛川駅への交通路の整備も掛川の中継地市場としての役割を低下させた。さらに、堀之内駅が旧城東郡地域からの集散地としての役割を果たすようになったことも、掛川の取引所の不振に拍車をかけたと思われる。掛川の取引所の移転をめぐる紛争は、このような交通網の発達とそれに伴う米穀流通の変容と密接な関連を持っていた。

明治三二年に農商務省が仲買人証拠金の増加を命ずると、仲買人達は到底これに応ずることはできず、取引所の維持は困難になった。掛川米穀製茶取引所は静岡米穀取引所に合併され、仲買店数戸は引き継がれることになった。明治三二年九月十九日をもって掛川米穀製茶取引所は解散し、地方的米穀市場の変容につれて、その使命を終えたのである。

## ⑤ 大井川疏水計画と交通網の拡大

### ア 大井川疏水の構想と測量作業

現在、掛川市南部の水田は大井川から導かれる用水によって灌漑されている。大井川右岸用水の掛川幹線が昭和四〇年に完成し、掛川市内九四〇ヘクタールの耕地がその恩恵をうけるようになった。かねてから旱魃に悩まされていた掛川地域、さらに小笠郡全域にとつて、大井川右岸用水の完成は水利条件を一挙に改善する画期的な出来事であった。この大井川右岸用水に匹敵するような大用水計画が明治二〇年頃、掛川の地主資産家たちの手によって検討されていた（図3-17）。

明治二〇年一二月と推測されるが、掛川の厚生社社員四名は関口隆吉知事に対して、「疏水工事測量願」を提出した。山崎徳次郎、松本義一郎、島井半次郎、山崎千三郎の四名は、大井川の水を東海道線牧原トンネルに沿って城東郡側に引水する水路の測量を行うため、県の測量技手を派遣してくれるようお願い出たのである。この願いは聞き届けられ、県の測量技手によって金谷宿までの測量が行われた。明治二一年一月六日には、四名の他

なると再び同取引所の不振が伝えられ、わずか三戸の仲買店も休業し株主、役員の間では解散の協議がなされていた（『静岡民権』明治27年10月24日）。

静岡県内有数の穀倉地帯である小笠郡から米が集荷される掛川は早くから米取引が活発だったと推測され、小笠郡一体の地方的米穀市場の中心である掛川に米穀取引所が設置されたのは当然の成りゆきであった。明治二六年に取引所法が制定さ



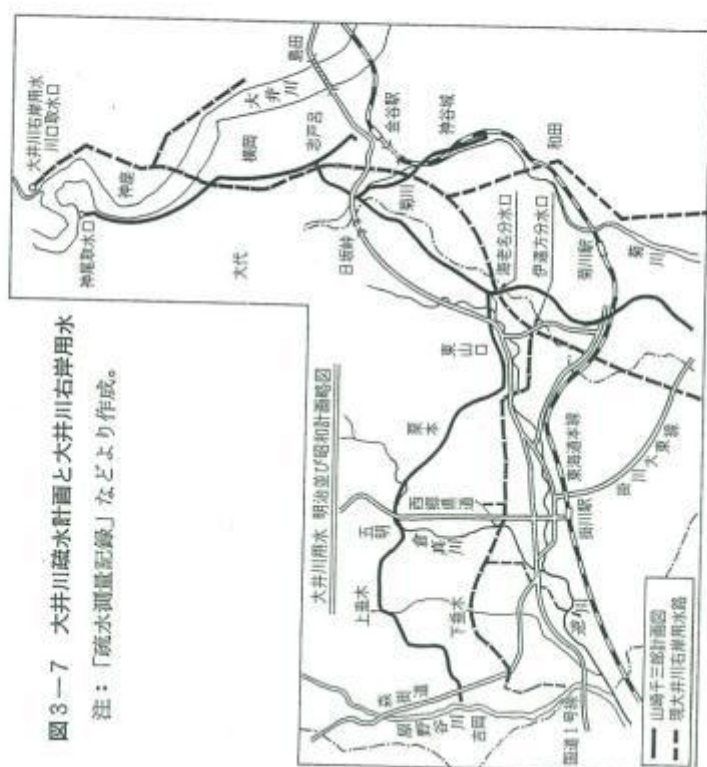


図3-7 大井川排水計画と大井川右岸用水

注:「疏水測量記録」などより作成。

に河井重蔵、三橋四郎次、丸尾文六が名を連ねた「疏水工事測量之儀ニ付願」が郡役所に提出された。その内容は、金谷以西、城東郡内の測量のため立木伐採などの許可を求めるものであった。

測量作業、計画策定を大学院工学士の小山友直に依頼することになり、明治二十一年二月二〇日、山崎邸にて小山と相談し、三月一日より測量に着手することに決定した。その際、測量のため助手四、五名を招くこと、および必要な器材の購入を小山に依頼した。小山らによる測量の進行状況は、「疏水測量記録」などの資料によって知ることができる。「疏水測量記録」には二月二〇日から五月二四日までの測量の様子が記されていた。

「疏水測量記録」の表書きが厚生社となっていることから、掛川の有力地主資産家の合意のもとでこの事業が着手されたといえる。

実際に測量に着手したのは三月一〇日以降であった。同日、河井重蔵らは戸長役場を訪れ、測量開始を届け出た。翌一日は、「午後零時小山氏外一同取入口及線路見分ノ為メ出張ス。始メ金谷鉄道隧ロヨリ北条前測量線ニ沿ヒ横岡渡船場ニ至リ、舟ヲ備ヒ地蔵峠ニ至リ上陸、夫ヨリ山上ニ上リ取入口ニ下リ、同所ヨリ船、牛尾村ニ至リ上夜間村湖月ニ投宿ス」とあるように、金谷より大井川からの取入口となる予定の地蔵峠上流まで視察を行った。翌二二日に小山技師は、地蔵峠から大代川までと大代川南岸から金谷トンネルまでの二区間の分担を決め、一四日から両区間の測量に着手した。

測量に関わる郡役所、戸長役場との折衝は、厚生社の実務を担当していた中西泰興が当たり、河井重蔵も現地の路査に参加していた。三月二八日には、「河井氏、中西第二区線路ヲ金谷官林迄巡見シ、其ヨリ中山新道ロノ北ニ沿ヒヒタル沢ヲ一見シ、又『コブナガ』ヲ巡見シ高道仙人ガ瀑布ニ至リ、佐野郡水路ノ考案ヲ新出シ、夫ヨリ掛川へ帰着ス(朝瀬村)ヨリ出発ス。夜山崎邸へ行き出張中ノ概要ヲ報告ス」と記されている。河井、中西の両名は大井川から佐野郡への水路をどのようにとるかを思案しつつ、金谷から掛川まで戻り山崎への報告を行っていた。

四月九日に、「河井氏金谷ニ行き小山技師ニ面会、大代『コブナガ』間、及菊川ヨリ馬背ノ測量、海老名村等ニ達ス佐野郡疏水ノ件ヲ協議シ免角其測量ヲ実行スルヲ決約ス」とあるように、これまで河井と中西が調査して

きた佐野郡へのルートを実際に測量することが決定された。四月二二日には、「小山技師及須藤氏并ニ中西同所新線実見ノ為メ、金谷ヨリ新道(東海道)ニ出テ牧ノ原ヨリ大代谷ヲ一見シ、『コブナガ』馬ノ背ヲ經テ海老名駅ヲモ一見シ、夕掛川ニ歸リ山崎、河井両氏ニ面會、両氏共同所ニ泊ス」とあり、用水路の視察が適宜河井と山崎に報告されていたことがわかる。

四月二七日には、地藏峠から金谷トンネルに至る二区間の測量が完了した。第一期の測量が終了したので、五月二日に吸月楼にて会がもたれた。小山ら七人の技師と山崎千三郎、山崎寅五郎、島井半次郎、河井重蔵らが出席し、測量作業の労をねぎらった。この日、山崎徳次郎は三河疏水を視察のため会を欠席していた。翌三日からは早速菊川・掛川間の測量に取りかかった。新たな測量区間は「松沢ヨリ伊達方村ノ日阪川合流点マデ」であった。また、同日に小山技師は、山内恒六より掛川宿の飲料水路敷設計書の諮問を受けていた。

その後も大井川疏水の測量作業は続けられ、測量の範囲は広がった。一〇月二三日には、「安藤君午後ヨリ中屋銀蔵同道大池近傍ヨリ逆川原ノ谷川迄徹底測量ニ付杭打ノ為メ相越サレタリ」とされ、大池村から原野谷川、逆川合流点まで測量が実施されようとしていた。一〇月末になると逆川の水量調査(一〇月二六日)が実施され、また、小山技師らは掛川農学社を拠点に測量結果のまとめに携わる日が多くなった。十一月になると作業を終え、帰途につく技師もあり、測量記録は十一月一〇日にて終わっている。

### イ 大井川疏水計画の作成

实地測量の結果をまとめた「大井河疏水工事計画説明書」が明治二二年十一月付で作成された。大学院工学士

小山友直によって作成された二四ページあまりの報告書によれば、大井川疏水の概要は次の通りであった。大井川疏水による灌漑面積は、佐野郡二〇〇〇町歩、城東郡五〇〇〇町歩の合計七〇〇〇町歩であった。この面積は佐野、城東両郡のほとんどすべての耕地に相当していた。七〇〇〇町歩の耕地を灌漑するためには、一秒時一立方尺の水によって一五町歩を灌漑できると仮定すると、佐野郡は一秒時一三四立方尺、城東郡は一秒時三三六立方尺を要し、合計四七〇立方尺が必要になる計算であった。

図3-8 掛川周辺の大井川疏水



方尺を要し、合計四七〇立方尺が必要になる計算であった。

この用水を供給する大井川の水量は、濁水時を選んで測量した結果、地藏峠北側の取入口予定地付近で、一秒時二五四切三三三となった。大井川下流で必要な用水量を四〇〇切と見込むと大井川疏水計画と合わせても八七〇切が必要な水量となり、十二分の供給能力があった。

大井川右岸の地藏峠北側から取り入れられた用水は、前掲図3-7のように、大代川を水橋によって渡り山腹に沿って志戸呂村宇音沢に至る。ここからトンネルによって菊川に抜けた用水は、菊川に設けられた貯水池に入る。貯水池から用水路は二つに分かれ、一つは城東郡東部を流れて佐倉村にて海に注ぐ城東郡東線であった。もう一つは、宇矢坪沢からトンネルによって佐野郡海老名沢に抜け、在来の河川を下って海老名村に貯水池を設ける。ここから用水は二つに分かれ、一つは西方村から城東郡西部の村々を経て沖之須にて海に注ぐ城東郡西線であっ



た。もう一つは掛川方面に流れる佐野線であり、図3-8のように伊達方村から千羽、五明を経て原野谷川に注いでいた。前掲図3-7のように現在の大井川用水と大井川疏水計画を比較するとかなりの差異があった。

報告書はさらに、取入口、大代川水橋、貯水池などの構造、計算について詳しく記述していた。既述のように実地測量が全城にわたって行われていたことと合わせて考えると大井川疏水計画は技術的にはかなり実現可能との見通しを得ていたといえよう。

さらに、大井川疏水の効果として灌漑以外にも数点が挙げられていた。そのうち、掛川地域に関係が深いものは、①海老名村の五〇尺の滝によって六〇〇馬力の動力を得ることができるので、東海道線開通によって将来近傍の工業発展に利するであろうこと、②従来飲用水に乏しい掛川宿の水源として疏水完成後は容易に伊達方、五明付近より導水できること、③海老名村の水門によって逆川に流れる水量を調節し、掛川宿から福田港に至る水運を盛んにすることであった。大井川疏水計画は単なる灌漑用水だけではなく、掛川地域の産業発展と結びついた遠大な構想であった。

明治三二年一月一〇日、掛川農学社および吸月楼を会場として開催された疏水測量報告会には、山崎千三郎、河井重蔵、丸尾文六、鳥井半次郎、岡田良一郎らと、佐野城東両郡下四五か村の代表者を含む六九名が参集した。大井川疏水計画に対する両郡の人々の期待感がこの報告会に現れていた。大井川疏水計画はこれ以上具体化することは無かったが、昭和二〇年代になって小笠用水計画、さらに大井川右岸用水計画として再登場し、国家的プロジェクトとして実現したのである。

## ウ 馬車交通の普及

東海道線が開通し各駅に貨物旅客が集中するようになると、掛川駅までの交通路を整備する必要が生じ、道路交通の新たな手段として馬車の普及がみられた。かねてから重要な交通路であった森町から掛川町に至る信州街道にかわって、本道馬車を敷設する計画が明治三二年に立てられていた。この計画は、「当初袋井宿近傍の有志者が森町より袋井宿へ出る間に敷設せんとて其の筋へ請願せしに略ぼ許可となり仮測量までもなせし程なるが、其の後掛川宿の有志者が突然其の線路を變じ森町より掛川に出る間に敷設せんとて、是れ又た事情を具して其のへ請願し、双方互角の勢となして競争し居る事となる」という状況であり、馬車路の敷設をめぐる袋井と掛川筋の間でし烈な競争が行われていた(明治三二年四月十二日)。また、掛川の有志者たちは、森町・掛川間の馬車路敷設と併せて、掛川・横須賀間の山道を改良して、車馬の往復の便を図ろうと計画していた(明治三二年四月十二日)。

掛川と袋井の馬車路をめぐる競争はいったんは袋井が掛川に譲る妥協が成立し、またその後袋井が妥協を取り止めて許可を得ようとするなど二転三転して、結局、翌三三年二月頃には双方とも却下との決定が下された(明治三三年二月五日)。しかし掛川町の有志たちは馬車鉄道の敷設を目指し、南郷村に森掛道路改修事務所を置き、測量を行った(明治三四年四月十二日)。

信州街道ルートの馬車鉄道が再び具体化するのは日清戦後の好況を経てからであった。明治三一年五月七日の『静岡民友新聞』は、「掛川町有志の計画せる同郡大坂村より、中、土方、佐東、上内田諸村を経て掛川に至り、又同所より森町に至る馬車鉄道は愈布設の協議整ひ掛川以南の道路は此程測量を終りしと云ふ」と報道し

た。この馬車鉄道は同年八月一日から掛川・森町間が開業したといわれる(同前、頁31.8.4欄)。

この他にも明治三一年中には、中泉駅より掛川停車場まで東海道線沿いに馬車路を設けようとする計画があった(同前、頁31.11.10欄)。また、明治三二年八月一日には、城東馬車鉄道の開業式が堀之内停車場構内にて挙行された。城東馬車鉄道は堀之内より南山まで、一日に二本が運行され、堀之内・南山間の運賃は二三銭であった(同前、頁3.6.2232)。

## エ 青田坂のトンネル工事

信州街道の要路である青田峠を越える山道はこれまでも改修が行われていたが、車馬の通行にとって難関であることに変わりはないので、青田坂のトンネル工事が計画された。明治二五年に、掛川町、南郷村、上内田村三ヶ町村組合が組織され、上内田村板沢と南郷村上張の間の青田坂トンネル工事を共同で行うことになり、次のような組合規定が定められた。

### 佐野郡掛川町南郷村組合規定

第壹条 佐野郡南郷村上張城東郡上内田村板沢郡界青田坂隧道工事ニ関スル事務共同処分ノ必要ヲ認メ掛川町南郷村上内田村三ヶ町村ヲ以テ町村制第百拾六条ニ依リ町村組合ヲ設置ス

第貳条 本組合会議ノ議員ハ毎町村ヲ一選挙区トシ毎町村會議員ノ互選ヲ以テ左ノ定員ヲ選出ス

但選挙ハ各町村長ニ於テ管理スヘシ

一、掛川町 五 名

一、南郷村 五 名

一、上内田村 五 名

第三条 組合会議ハ前条ノ規定ヲ除ノ外渾テ町村会ノ例ヲ適用ス

第四条 本組合ノ事務ハ渾テ掛川町南郷村組合町村長ノ管理トス

第五条 本組合ニ於テ負担スヘキ費用ハ組合会議ノ費用工事ニ係ル地方税補助不足額及事務取扱ニ係ル諸般ノ費用トス

第六条 本組合ニ於テ負担スヘキ費用ハ左ノ割合ニ拠ルモノトス

掛川町	金額	三分六厘
南郷村	同	三分二厘
上内田村	同	三分二厘

第七条 組合ノ負担ニ係ル費用賦課法ハ組合会議ノ決議ヲ以テ各町村会ヲシテ議決セシムルヲ得

掛川町三六%、上内田村と南郷村各三二%という工事費負担の割合が決められ、地方税補助を与えられることになった。明治二七年度「青田坂改良工事出来形精算帳」によると、工事費総額は六〇七一円余という巨額にのぼり、そのうち地方税補助が四八五六円、村費負担は一二一四円であった。改良工事費のうちでは青田坂隧道工事の費用が三七八六円余と六二%



青田坂トンネル



を占めていた。六四間のトンネル工事には、レンガ一九万九四三四枚、セメント一九四樽が使用され、工法の近代化が進んでいたことがわかる。

明治三四年四月には土方村入山瀬から掛川町に通ずる風吹道路の改良工事が進行中であり、風吹の第一号トンネル(六五間)は既に貫通し、第二号トンネル(二二間)の開削に着手したところであった(明治三四年四月)。また、明治三六年十二月には、上内田村子隣の一八〇間に及ぶトンネル(岩井寺トンネル)が開通間近と伝えられていた(明治三六年十二月)。

#### オ 「二俣線」計画の登場

掛川を起点とする馬車鉄道の許可を得ることに失敗すると、これにかわって本格的な鉄道計画が立案された。明治二八年十二月二七日付で、掛川町の山崎千三郎ら一六名は、静岡県知事に対して掛川から森町を経て二俣に至る「輕便汽鐵道」の敷設を申請した。昭和一五年に実現する二俣線(現在の天竜浜名湖鉄道)の構想が早くも登場したのである。

「掛川鉄道株式会社創立願」によると、「遠江国ノ地勢タル中央以北ハ山脈重疊為ニ交通ノ便ヲ欠キ候ヘトモ巨木良材ヲ出シ製茶業ノ最モ盛ナル其他椎茸薪炭石灰等ノ物産ニ富ムヘ実ニ此地方ニ有之候而シテ二俣町ハ天龍川ノ東岸ニ位シテ同川沿岸ノ物産殊ニ材木ノ輯湊スル所又森町ハ北部山間地方ニ入ルノ咽喉ニシテ製茶等産集ノ地ニ御座候ヘハ人口ノ繁榮榮ノ度東海道ノ旧宿駅ニ拮抗仕候」とあるように、遠州北部の森町の物産を輸送することが鉄道敷設の目的であった。

創立願は森町から袋井駅に貨物を輸送するよりも掛川駅に搬出した方が有利な理由として、天竜川沿岸や森町から出荷する木材、製茶、椎茸などの物産は東京・横浜方面へ送るものが多く、より東京に近い掛川駅から出荷するのが有利であること、森町、二俣で消費される物品は東京方面から送られるものが多いこと、そして、掛川町は浜松に次ぐ都市であり、米穀取引所、掛川銀行の所在地なので鉄道で森町方面と結ばれると交通量の急増が見込まれることを挙げた。さらに、将来は城東郡にも路線を延長し、城東郡の豊富な米穀と北部地方の木材などの流通を円れば両地方の経済に好影響を与えるという構想であった。

掛川鉄道株式会社は、資本金三〇万円、工費三〇万円、貨物旅客運賃の収入見込は五万三四〇六円とされ、山崎千三郎以下の出資者は、表3-30のような顔ぶれであった。山崎、松本、島井という掛川町の有力資産家を筆

表3-30 掛川鉄道の出資者一覧

氏名	住所	株数
山崎千三郎	掛川町	300
松本鏡一郎	同	200
島井半次郎	同	100
山田百四郎	同	100
佐々木英作	二俣町	100
富田清銀	同	100
河井重藏	同	100
黒田覚次郎	南郷村	50
山田定七郎	掛川町	50
黒田平五郎	平田村	50
松村源次郎	南郷村	30
戸塚藤平	掛川町	30
永長平	同	30
大庭豊	同	30
沢利吉	同	30
計	—	1,330

出典：「掛川鉄道起業目録見書」

頭に、二俣町三名と城東郡平田村の地主黒田定七郎らから、一三万三〇〇〇円の出資を得る計画であった。

さらに、明治二九年四月一八日の「掛川鉄道株式会社発起人追加願」では、山崎千三郎等七七名へと発起人の数が増加した。発起人の中には、東京の浅沢栄一、浅野総一郎、大川平三郎、藤山雷太ら著名な財界人が加わ



り、小笠原からは丸尾、松浦、三橋ら有力者が追加された。また、周智郡、磐田郡、引佐郡などにも発起人の範囲は拡大した。明治二九年の起業計画は資本金五〇万円へと変更されており、計画拡大に伴い東京の著名財界人の出資をおおき、さらに、小笠原、周智郡、磐田郡などより広い範囲から出資者を募ろうとしたのであろう。

同じ頃、遠参鉄道という同様の計画が立案されていた。明治二九年七月二七日の「遠参鉄道株式会社設立認可」によれば、榛原郡の相良港を起点として、掛川町、森町、二俣町、金指町、愛知県八名郡富岡村（現在の新城市）を経て、愛知県南設楽郡新城町（現在の新城市）に至る六〇マイルに及ぶ路線が計画されていた。さらに、引佐郡龜玉村より分岐して浜名郡笠井村を経て同郡和田村にて官設鉄道に接続する八マイルの支線と、愛知県富岡村より分岐する九マイルの支線も計画に含まれていた。「遠参鉄道株式会社目論見書」は、同社の資本金を五〇〇万円（一〇万株）とし、本社を引佐郡金指町に置くとした。同社発起人一四七名の内訳は、静岡県七六名、愛知県一三名、山梨県二名、神奈川縣一名、東京府二七名であり、掛川鉄道計画の中心になった掛川町の発起人との重複はほとんどなかった。掛川鉄道計画が会社名の通り掛川町の有力資産家達によって立案されたのに対して、遠参鉄道計画は西遠地方が中心となり、より大規模なプランが作成された。

掛川町においては遠参鉄道の建設を促進する動きがあった。明治三〇年一〇月三日には、掛川町の有志が遠参鉄道敷設の速成を望んで鉄道期成同盟会を組織し、第一回の総会を紺屋町広楽寺にて開催した（明治三〇年十月五日）。出席者は一五〇余名、発起人惣代の宮川太平が開会の趣旨を述べ大庭豊太郎町長から計画賛成の演説を得て、役員選挙を行った。

遠参鉄道は明治三〇年四月に鉄道会議を通過し、翌三一年四月に掛川・豊川間の実測許可の免状を下付され、実測に着手せんとした（明治三一年五月三日）。折り悪しくも不況の到来のため、計画はいったん停止の状況となったが、翌三二年一二月には掛川から天竜川西岸に至る一五マイルは測量が終わり、残り区間の実測と株式払い込みを経て創業総会へ向けて準備中であつた（明治三二年四月）。掛川鉄道計画、遠参鉄道計画の結末は明らかでないが、いずれも日清戦後の好況の中で生まれ、企業勃興ブームが過ぎ去るとともに表舞台から姿を消すことになった。

掛川鉄道計画の主唱者であつた山崎千三郎は明治二九年七月四日、病を得て死去した。享年四二歳であつた。大井疏水計画をはじめ掛川周辺の産業基盤整備事業には必ずといってよいほど、山崎千三郎の名前が登場する。掛川地域随一の地主資産家として、また積極的な企業者活動の面で、千三郎の残した足跡は大きい。しかし、その公共性の高い事業が多くの場合実現に至らなかったことにも注目する必要がある。それは千三郎個人の力量に起因するのではなく、地域経済の発展の限界性というべきであらう。千三郎に続いて明治三〇年三月一四日には、鳥井半次郎が死去した（明治三〇年三月十七日）。掛川地域の有力資産家の当主が相次いで死去したことは、掛川の地域経済が日清戦後に迎えた変化の時代を象徴するかのようであつた。

(松ヶ岡保存活用委員会で説明資料)

# 掛川銀行小史

平成二十五年十二月

関 七 郎



# 掛川銀行小史

## はじめに

掛川銀行は明治十三年に創立し、昭和十年に資産を協和銀行に譲渡され解散した地方銀行であるが、この五十六年間の行史を公刊されたものはない。

## 創立前 明治前期の金融経済の歩み

掛川の地は 明治元年(1868)に維新政府の手で これまで この地を支配してきた掛川藩太田侯が上総へ国替えになり、かわって江戸(東京)から移された駿府(静岡)藩の一部になった。明治二年には版籍奉還となり、四年七月の廃藩置県によって静岡県の一部になったが、同年十一月に大井川以西の遠州一円は浜松県になり、掛川は明治以前は一藩の藩府としての政治・経済・文化の中心都市だったのが、その後は地方行政上の辺地に置かれ、後年の低開発地域になる端緒として社会的な制約を受ける要因となった。

廃藩置県によって国と県と結ぶ全国規模の金融経済事業に係わっていた小野組が 五年に出張所を設けて、県の公金出納の取扱いを行い、六年の地租改正以前は年貢租米も取扱い、掛川地方もこの小野組の管轄下にあった。六年に石代金納となり、七年小野組が中央政府の政策的干渉で破産し この制度は改められた。

近代的な銀行制度は五年(1872) 国立銀行条例により第一より第五の国立銀行が設立されたが、一般には設立されなかった。九年に条例が改正されて設立が容易になると、国立銀行が全国各地に設立され、十二年(1879)十一月まで百五十三の国立銀行が設立され終結した。

その資金源には士族に与えられた金禄債が当てられた。金禄債の保存の目的もあり、往時の幕府代官所 または藩府の所在地に多く設置された。静岡県下でも浜松(第二十八-資本金二万円)、二俣(第三十八-資本金五万円)、見付(第二十四-資本金五万円)、静岡(第三十五-資本金七万円)、沼津(第五十四-資本金七万円)に設立されている。掛川でも設立の動きはあったが、当時は地租改正運動の渦中であり、明治維新に掛川藩が上総国(千葉県内)へ移封され その後入居した旧幕臣も転出者が多く、士族の定住の割合が少なかったため国立銀行の設立には至らなかった。

## 掛川銀行の創業の事情

明治十二年(1879)の郡制が施行されに地方の自治が定まり、地方で官金を取り扱う銀行が必要となり、また 殖産振興の見地からも 銀行を設置する機運が高まった。掛川に佐野・城東郡役所が設置されると、銀行の設置の必要が生じたが 既に国立銀行の設立期間が満了になり、認可を得られなかったので、佐野城東郡長であり当地の指導的な資産家でもあった岡田良一郎が中心になって、地方の資力を結集して明治十三年八月に掛川銀行が設立された。

八月二日創立願書提出 九月二十五日免許され 十月十日掛川に開業 資本金三十万円頭取山崎千三郎。十一月 東京支店設置。十四年四月 島田支店 相良出張所、五月 横浜出張所 九月に三春出張所(福島県)を開設と 十四年下期に四十五万円に増資している。十五年四月に金谷出張所も開設された。

設立当初 未だ地方に銀行の設立が見られない時期で、旧藩時代よりこの地にあり 経済



活動に熟達した御用達を勤めた大庄屋で 資産家の 山崎徳次郎・山崎千三郎・松本文治・鈴木八郎・鈴木九一郎・丸尾文六・河井重蔵・岡田良一郎・鳥井半次郎や、東京在住の高級士族 富永謙八郎・岡山定恒（旧掛川・横須賀藩士族）等も加わった 超資産家の資金を結集し、その指導の下 大規模な銀行の設立となった。

明治前期の金融機関のうち私立銀行中の屈指のもので資本金は当初三十万円、貯蓄銀行を兼業し、当時の国立銀行（静岡三十五国立銀行は七万円・浜松国立二十八銀行は十二万円）をしのぎ、その資力と内容は当時としては全国有数の大銀行であった。

## 設立当初の経済環境

明治十年代、当初はわが国の国策として 殖産興業がさげばれ、その主体は農業であり、当地の産業は農業が中心で、掛川銀行は 当地の特産の製茶に必要な資金の融通を主な目的とした。茶資金は、農商業者がの 従来横浜の商店を頼っていた融資を銀行が賄い、荷為替の便を開き、更に進んでは海外直輸出の計画を立て その振興のために事業資金の融通に大きな役割を果たし 地方の発展を図る意図であった。

当時掛川の経済圏は、東遠一円に広範囲におよび、東海道と信州・相良街道（塩の道）を結ぶ拠点で、農業生産物の集散地として中心的な地位を占めてきた。明治十年代なると各地に中小事業が生まれ 地域的な小規模金融事業が発生し、更に交通の発達により 地方の中心的大銀行の散在価値を減少させた。

## 掛川銀行の特色

事業は 明治政府の殖産興業政策の一翼を担うものとして、製茶資金の融通が取り上げられ、当地特産の製茶は 従来横浜の商店に頼ったものを、地元の農商業者に資金融通の利便を与え 地方で賄い、為替の便に重きを置き、更に直輸出を行えるような計画を立て、横浜に出張店を設けそれに便宜を与え 地方の発展を意図するもので、銀行事業として預金・融資の外に為替業務では特に茶の生産地である遠州で、掛川の本店と金谷支店、静岡支店・島田支店は駿河の茶業資金にかかわった。

銀行経営に当る首脳陣は旧藩御用達・庄屋のような指導力を持った経営者であったが、掛川の地が農村で近代的な発展に基盤に乏しく、また融資対象の製茶・製絲の一次産業に付属し、その生産形態が近代産業 商工業としての性格を持たず、さらに 茶資金・生絲資金は その事業が一面 天候等の自然条件が 産出に大きな影響を与え、他方 仲介業者の相場や 海外輸出は国際相場などに大きく左右される山師的な金融となり、また 年中平均した資金需要でなく 季節的な資金需要だった点 金融機関として困難な事情を抱えていた。

茶業の融資と為替業務は季節的な資金需要であれば 製茶と需要時期が逆の養蚕・生絲にあて、生産地の岩手・福島両県下 一ノ関・二本松・三春から横浜港に運ばれ輸出されるので そこに出店して融資と為替の便を計り、横浜支店で為替が運用され、東京支店では 両県と横浜の調整と統括とともに、東京の旧華族・士族の都市での事業へも融資が行われた。

株式会社 掛川銀行、事業 普通部（請為替 貸付金 当座預金 当座預金貸越 定期預金 手形割引 代金取立 諸公債証書 地金銀売買 両替 官庁為換方 等）・貯蓄部（貯蓄金預り）、存続期間 明治十三年十月より満二十ヶ年とする。



十四年の下期(第三営業期)の株主総会で増株を議し資本金を四十五万円とした。

十八年一月十一日に掛川五百四十三番地に新築落成した。十三年の開業時は掛川宿八百二十九番地(十王町)で町並の西に偏し不便なため 連雀中央の大手口南側に面したの火除けの空き地に相応しい家屋一棟土蔵二棟に納屋一棟建坪八十六坪余(外に二階四十二坪余)の壮大な建物を新築した。

十月十一日には岡田良一郎(資産金付所蔵・全額として)頭取に就任、掛川銀行定款と諸役員失職処分規則が制定され、十九年には役員は頭取岡田良一郎 取締役山崎千三郎 鈴木八郎 永富謙八 河井重蔵 鈴木九一郎 伊藤賢八で、資本金は 四十五万円 この内四十二万円は普通銀行営業資本にあて、三万円を貯蓄銀行営業資本とした。株式数は四千五百株で一株百円とし全額が払込済だった。

二十六年(1893)に「株式会社掛川銀行定款」が改められ、同年 岡田良一郎が頭取を辞任し、河井重蔵が頭取に就任した。二十七年一月三十一日 岡田良一郎を専務取締役し、取締役として 岡田良一郎(倉真村十九番地) 鈴木八郎(東山口村伊達方五番地) 永富謙八(東京市日本橋区浜町一丁目二十四番地) 鈴木九一郎(東山口村伊達方五十八番地)の登記をした。

## 明治十年代の経営環境

これまで掛川が持っていた経済圏は 東遠一円の地域を占め、東海道と信州・相良街道を結ぶ拠点であり、農産物の集散地として東遠広域地区の中心にあった。明治十年代に各地に中小事業が生まれ、地域的な小規模金融事業が発生し、さらに交通の発展で地方の集中的大銀行の存在価値を減少させた。掛川銀行がその資力と規模の割に 組織力と経営基盤が薄弱で、地域の必要に応じた地方支店を設置するほどの余力を持たず、特に掛川より離れた城東郡に 小規模銀行が設立をされると地域での為替業務が減少した。

銀行の経営は、創立以来直ちに 明治十四年の松方正義大蔵卿による紙幣整理のインフレと これに続く地方の窮乏は、この銀行の出鼻を挫いた感で、出鼻を挫かれ、十五年より二十五年までの間 松方デフレ政策のしわ寄せで、地方住民は困窮に喘ぎ、都市部の商人も事業経営の不振で 十八・九年は営業も容易でなかったが、十九年に景気が回復し、二十年より各種事業が勃興を見せてようやく軌道を取り戻した感があった。

## 店舗網 本店 支店 出張店

店舗は当初は 掛川の本店と 東京に支店が置かれ、臨時出張店として 関連地域に事務所を構えて 季節的な営業を行い、出先地域で荷為替その他必要な業務を行っていた。

掛川本店 明治十三年十月十日 掛川宿八二九番地(十王町)で山崎千三郎を頭取として開業、以来 昭和十年の解散まで五十六ヶ年間継続して経営された。

十八年一月十一日 掛川五四三番地(連雀町)に掛川銀行の本店建物が新築落成しこれに移った。このとき 岡田良一郎が頭取に就任 定款と諸規則も定められる。初期には本店の業務に付随し 臨時の季節的な出張店を設けている。

銀行の預金・融資・為替業務を扱ったが、茶の生産地である遠江の製茶には掛川の本店と金谷支店が、駿河の茶業資金は静岡支店・島田支店がかかわる。

本店の職員は開業時は二十三人 三十年から三十四年頃は十六・七人で出張店へは本店よ



り出向いた。大正十年頃まで十五～十三人ほどだった。

十九年 掛川銀行 掛川本店 見付 日坂 吉岡出張所(季節的に出店した) 茶業 東京支店 茶業 島田支店 茶業 金谷出張店 送金荷為替

二十二年 掛川本店 東京支店 島田支店 金谷出張店 金谷出張店 横浜出張所 貸金送金荷為替 生糸産業経営融資

三春出張店23年1月終る 二本松出張店22年1月30日閉店

見付出張(店)(十三年設置)・日坂出張店・日坂出張所・吉岡出張所があった。十九年記事に「掛川銀行 掛川本店 見付 日坂 吉岡出張所 送金荷為替 茶業」とある。

相良出張店は 明治十四年四月三日 榛原郡相良町に開設されたが、同年九月二十日に閉店する。(十五年上期の考課状には「當季は相良・見付・静波等の出張所は休業したり」とある)

金谷出張店は 十五年四月十六日 榛原郡金谷町金谷河原八十番地に開設。十九年の記事に「茶業 金谷支店(出張店)」とあり、二十七年一月三十一日に登記される。三十一年四月十六日に閉鎖された。行員は三～四人程。

島田出張店は 明治十三年十月十日設置届の提出とあり、又 十四年四月五日に開設ともあり 志太郡島田町二八二番地の二 で、十五年上期より支店に扱う。十九年記事に「島田支店 茶業」とあり、二十七年一月三十一日に登記され、三十五年二月二十八日に閉鎖されている。行員は五・六人程。

静岡支店は 二十三年(1890) 静岡市に開設し、この年上期よりを常設とした。二十五年十二月十四日の火災で類焼し十五日に栄町の借家へ移転し 十二月三十一日 両替町五丁目へ仮店舗を設け移転したとある。二十七年一月三十一日に登記され このとき呉服町三丁目一番地(後の呉服町一丁目六番地の十一)としていた。大正六年五月一日に愛知銀行へ営業譲渡されている。行員は七人より十人程だった。

岩手・福島県下 生糸生産地の一ノ関・二本松・三春等から横浜港に運ばれ輸出したので 横浜支店が設けられ、季節的需要で 為替により運用され、東京支店では東京の旧華族・士族の事業に融資された。茶資金・生糸資金は事業が天候等の自然条件により産出に大きな影響を与え、他方にて仲介業者の相場や、海外輸出の国際相場にも左右されるという山師的な金融で、年中に均等した需要がなく 季節的な資金需要だった点で金融機関として困難な事情を抱えていた。

東京支店は 明治十三年十一月十日 東京府日本橋区濱町一丁目二十四番地に設置し、翌十四年八月一日に日本橋区新葭町一番地に移転した。十九年記事に「東京支店 茶業」とある。二十七年一月三十一日登記される。東京での営業とともに 横浜支店・東北各出張店を母店として統括した。大正六年十二月三十一日 愛知銀行に営業譲渡されている。行員は十四年が八人で二十年頃より五・六人程だった。

横浜出張店は 明治十三年設置ともあるが、十四年五月七日 神奈川県横浜市元浜町四丁目三九番地に開設とする。この店は為替業務の必要時期に季節的に営業され、十六年十月三十一日をもって一時休業し、十七年には四月二十一日に開店 六月三十日限りで一時休業し、十八年には五月一日に開店 六月三十日をもって休業、十九年に開かなかった。十九年の記事に「茶業輸出の為 横浜出張店」とある。二十七年一月三十一日に登記された。二十九年上期より支店として扱う。三十一年四月十六日に閉鎖された。横浜港は安政六年に開港、幕府の築港で内外商人の移住を奨励した。駿河の茶商野呂伝左衛門を始めとして多くの商人が移住し、横須賀の回漕問屋清水家の横浜出店があって、横浜正金銀行・国立



第三銀行と為替取引を行い、主として緑茶の輸出を取り扱い、荷為替が多く扱われた。

一ノ関等（養蚕・生糸生産地）・横浜（海外輸出）と東京に支店を設け事業を行ったのは、掛川本店を設立した経営陣が農村地域の旧藩御用達・庄屋であり、農村地域が基盤で近代的要素に乏しく、製茶・製糸事業は共に一次産業でその生産は近代産業の要素に乏しく、設立当時は政府施策の殖産興業を担うものとして、福島・岩手両県下にも出店し、横浜支店の調整と統括をはるため東京支店は都市の事業にも融資をした。

三春出張店は 十四年九月九日 福島県田村郡三春町に開設、十九年記事に「三春出張店 貸金 送金 荷為替 生糸産業 経営融資」とある。二十二年二月未開店、二十三年一月終るとある。二十七年一月三十一日に登記される。三十一年四月十六日に閉鎖された。行員は四～七人程だった。

平出張店 二十五年八月二日 福島県に開設、同年十一月十五日閉店している。

一関出張店 二十六年八月十九日 岩手県岩井郡一関町に開設、二十七年一月三十一日に登記される。三十一年四月十六日に閉鎖された。

二本松出張店は 二十年九月六日 福島県安達郡二本松町に開設。二十二年一月は未開店、二十七年一月三十一日に登記される。三十一年四月十六日に閉鎖された。行員は四人程開業時に出向いた。

店舗は当初 臨時出張店として 関連地域に事務所を構えて 季節的な営業を行い、出先地域で荷為替その他必要な業務を行っていた。

二十七年一月に支店として 島田町 金谷町 静岡市 東京市 横浜市（鶴県）二本松町 三春町（群県）一ノ関町の八ヶ所の支店設置が登記されている。

二十年より各種事業が勃興を見せ、二十二年には東海道鉄道が開通し、二十三年に銀行

条例が公布されると 当地での経営事情も一変した。

## 二十年代の経営環境の変化

二十二年(1889)に東海道鉄道の開通は 従来 製茶が掛川から相良より海路で横浜に運ばれ、東京の需要に満ち、さらに海外への輸出されていたが、清水が貿易港として開港され 県庁所在地の静岡が製茶業の中心都市として発展したため、横浜支店は機能を減少し、静岡に支店を設ける必要が生じ、静岡に本店を持つ銀行が発展した。

当行が その資力と規模の割に 組織力と経営基盤が薄弱で、地域の必要に応じた 支店を設立するほどの余力を持たなかった。そのため中心的な支店網を必要とした時期のつまづきから発展要素を閉ざす結果となった。

さらに二十二年以降 議会政治の発達から 当地方の中心的な人物で 政治的にも経済事業にも力をもつ岡田良一郎と 政党の対立的立場に立った 河井重蔵や 南遠の丸尾文六等が 別々の動きを取ったことも加わり、当地方の中心地にあった掛川銀行も経営陣の意思疎通の乱れから 地域経済の分立で大きな発展を見るには至らなかった。

二十六年に 榊組掛川銀行として 定款が改定され、同年 岡田良一郎が辞任して 河井重蔵が頭取に就任している。

## 二十年代後半からの小銀行の分立

二十七・八年の日清戦争に続く好況から事業が勃興し、これに刺激され資金融通の必要



から こうした銀行は村内の資産家が個人か数人の共同出資で

明治十年代の掛川銀行のように全国有数の大銀行に集中された地方の資金の流れは、二十年代の後半から三十年代には分散し、小銀行の乱立という形になった。

二十三年(1890)に普通銀行条例が公布され、本店周辺でも地方資産家の銀行設立への考え方が変わり、二十六年(1893)銀行条例施行により私立銀行の設置が容易になり、加えて銀行類似会社を廃止させこれを銀行となした事と、更に二十七・八年の日清戦争後の好況により事業の勃興を見せ、これに刺激されて資金融通の必要から各地に小規模な銀行が多数設立され、当行本店より少し離れて城東郡下で村毎に弱小銀行が乱立した。こうした銀行は町村の資産家が個人又は数人が共同出資して設立したもので内容も極めて貧弱であった。十年代は掛川銀行のように全国有数の大銀行に集中された地方の資金の流れが、二十年代の後半から三十年代に分散し、小銀行の乱立という形になり、資金が分散したが、本行の発展を妨げる一因になった。。

こうした小規模な銀行は、早くも十四年 山田彦十によって掛川町塩町に銀行類似会社として会信社が資本金七万八千円で設立し、二十六年に組織変更して会信銀行になったのを初めとし、三十年より三十四年までには 掛川商業銀行(松浦五兵衛により三十年四月掛川町仁藤に資本金五万円で設立、原ノ谷に支店を置く)、三十一年三月に日坂村で本目藤十が資本金三万円で日坂銀行を、三十二年四月に大池村二瀬川で平尾平十が資本金五万円の大池貯蓄銀行を、三十三年八月に平尾平十が掛川町西町に資本金は四万円の会信貯蓄銀行を、この月 上内田村に栗田芳太郎が資本金は十五万円で上内田実業銀行を、三十四年二月に榛葉幸蔵が東山口村塩井川に資本金三万円で良純銀行を、同年三月 松浦五兵衛が上西郷村で資本金四万円の西郷信用銀行(二十八年頃西郷信用組合として設立し 三十三年施行の産業組合法によらず銀行に改組)を設立され、掛川地区内には六行もあった。

### 三十年代の動き 経営不振への道程

二十九年(1896)十月十一日に取締役 鈴木八郎が退任し、三十一日の臨時総会で飯塚為八(島田町二八二番地)が当選就任し、十一月二十日には取締役 永富謙八が退任、三十年一月十日の総会にて山崎百四郎(掛川町掛川八〇八番地)が当選就任。七月十六日には専務取締役 岡田良一郎と取締役鈴木九一郎が退任し、八月一日の総会で専務取締役に山崎徳次郎(掛川町南西郷八七番地)、取締役に河井重蔵(南郷村上張四九番地)が当選就任している。三十一年一月十日に取締役 飯塚為八が退任、この日の総会で鈴木九一郎(東山口村伊達方五八番地)、伊藤賢三(日坂村日坂三五番地)が取締役に就任した。同日 引続く臨時総会で金谷・横浜・二本松・三春・一ノ関各支店出張所の営業閉鎖が決議され、四月十六日にこれら各支店出張所が閉鎖し、金谷以外の各出張所の残務は東京支店へ引継かれることとなり、十九日に閉鎖登記が行われた。翌三十二年二月十五日 営業期間を明治五十三年九月迄二十ヶ年の延長を大蔵大臣の認可を得、三月四日に登記した。同年八月二十一日に監査役と支店所在地について、監査役は桜井椎三郎(小笠郡比木村一九〇番地)、戸田寛作(曾我村高御所二番地)、黒田定七郎(平田村下平川二四五番地)、支店所の所在地は 東京支店(東京府東京市日本橋区新葎町一番地)、島田支店(静岡県志太郡島田町二八二番地の二)、静岡支店(静岡県静岡市呉服町三丁目一番地)として登



記されている。

しかし一方で、産業の変化と二十九年に全国を襲った日清戦争の反動恐慌、東海道鉄道開通の以来交通機関の整備に伴う金融上の便益、清水港開港等の経済上の変化、地方銀行の多数乱立といった地方経済事情の変化から、明治三十一年(1898)に掛川銀行では金谷・横浜・二本松・三春一ノ関の各支店を閉鎖した。この不況は明治三十四年を頂点として地方銀行に打撃を与え、三十五年には島田支店をも閉鎖している。

三十三年一月二十一日に監査役の戸田寛作が任期満了解任、同日の株主総会で監査役を改選し大庭審己(和田岡村吉岡二六番地)が当選就任した。この年十月四日に取締役 山崎徳次郎が死亡。翌三十四年一月十日の株主総会で取締役の補欠選挙を行い山崎覚次郎(東京市小石川区指ヶ谷町七〇番地)が、監査役は桜井樵三郎・大庭審己・黒田定七郎が当選就任した。六月二十五日に取締役 伊藤賢三が辞任し、三十五年一月十日の株主総会で取締役の補欠選挙を行い 秋山善平(掛川町番外四一六番地)が当選就任し、監査役の満期改選で大庭審己・黒田定七郎が再選、鳥井俊三郎(掛川町掛川一四〇番地)が新任した。この日の総会で島田支店(島田町二八二番地の二)の営業閉鎖が決議され、二月二十八日に閉鎖された。六月二十八日に取締役 山崎覚次郎が辞任している。

不況は三十六年より やや回復の兆しを見せ、三十七・八年の日露戦争による軍需面へ経済の集中も この地方では寄与するものは少なく、産業の近代化は一向に進まなかった。

日露戦争の勃発による軍需面への経済の集中は この地方へは寄与するものは少なく、産業の近代化は一向に進まなかった。明治中期以降 わが国の近代資本主義経済が確立し、本格的な金融機関が発達した時代であったが、この地方の経済活動は他の地域に比べて発展させる要素に乏しく、この地の人々の並々ならぬ努力にも拘わらず、先進地域の急速な発達の前に立ち遅れ、企業と経済が取り残され、経済界の好況も この地方の経済を潤す事も少なく、不況時には深刻な影響を受け、明治以降の度重なる恐慌により 大正十年以降は地方資産家の資力を結集して築いた地方銀行は衰微の一路を辿った。

明治三十六年(1903)一月十日の株主総会で取締役 監査役の任期満了で改選し 取締役は山崎百四郎・鈴木九一郎・河井重蔵・秋山善平、監査役は大庭審己・黒田定七郎・鳥井俊三郎が就任、取締役の補欠選挙で松本義一郎(掛川町掛川一二〇番地)が当選就任した。三十七年一月二十三日の株主総会の監査役を改選し大庭審己・黒田定七郎・鳥井俊三郎が再任就任。三十八年一月二十三日の株主総会の監査役改選で三人が再任就任した。七月二十三日に監査役 黒田定七郎が辞任。翌三十九年一月二十三日の定時総会で取締役監査役の改選があり 取締役は山崎百四郎・鈴木九一郎・河井重蔵・松本義一郎・秋山善平、監査役は 大庭審己・鳥井俊三郎・山崎淳一郎(掛川町南西郷八七番地)が当選就任した。

日露戦争と戦後の好況に続き、四十年には反動恐慌で株式が暴落し 経済界は暗雲が覆うように 明治末より大正初年かけて不況で沈滞した。

## 四十年代から大正初年への動き

明治四十年(1907)一月二十三日の株主総会で監査役を改選し大庭審己・鳥井俊三郎・山崎淳一郎が再選重任し、翌四十一年一月二十三日も同様に 再選重任している。四十二年一月二十三日の株主総会では取締役と監査役を改選し 取締役には 松本義一郎・山崎百四郎・河井重蔵・山崎淳一郎・秋山善平が監査役には 大庭審己・鳥井俊三郎・鈴木九一郎



が当選就任した。翌四十三年一月二十三日の株主総会で監査役を改選し 大庭審己・鳥井俊三郎・鈴木九一郎が再選就任した。四月一日に監査役の大庭審己が居所を（和田岡村吉岡九四一番地と）変更した。四十四年一月二十三日の株主総会で監査役を改選し全員再選重任した。この役員変更登記にあわせ これまで登記上 本店所在地が佐野郡だったのを、明治二十九年四月一日に郡廃置施行で 小笠郡掛川町掛川五四三番地に改めるのを あわせ変更登記を行った。

四十五年(1912)一月二十三日の株主総会で取締役と監査役が任期満了したので改選し 取締役に松本義一郎・山崎百四郎・河井重蔵・秋山善平・山崎淳一郎が再任、監査役到大庭審己・鳥井俊三郎・鈴木九一郎が再任した。大正二年一月二十三日の株主総会で監査役を改選し全員再選重任した。十二月二日に取締役 山崎淳一郎が死亡し資格が消滅し、三年一月二十三日の株主総会で取締役の補欠選挙を行い 山崎肅五郎（掛川町掛川六六二番地）が当選就任した。この時 監査役の改選で全員再選重任した。四年一月二十三日の株主総会で取締役・監査役の任期満了し改選の結果 取締役に 松本義一郎・山崎百四郎・河井重蔵・秋山善平・山崎肅五郎が全員再任し 監査役も 大庭審己・鳥井俊三郎・鈴木九一郎が再任した。翌五年一月六日に取締役の山崎肅五郎が辞任し、二十三日の株主総会で取締役の補欠選挙が行われ 大庭審己が当選 就任した。この時 監査役の改選もあり 鳥井俊三郎・鈴木九一郎が重任し、黒田定七郎（平田村下平川二四五番地）が新たに当選就任した。

大正二年(1913)に静岡支店の大口取引先の数軒で事業の失敗から倒産し、その貸付金回収が容易に出来ず、地元での風評被害も加って支店の経営が困難になった。

六年(1917)一月二十三日の株主総会で監査役の任期満了につき改選し、全員再選重任された。この年三月十四日の臨時総会で静岡支店（静岡県静岡市呉服町三丁目一番地）の閉鎖を決議し、二十九日に静岡支店の閉鎖について大蔵大臣認可を受け、四月三十日に同店の営業閉鎖した。七月二十三日の臨時総会で大蔵大臣の認可の上 東京支店（東京府東京市日本橋区新葭町一番地）の閉鎖を議決、十二月三十一日に閉鎖した。

静岡支店と東京支店を廃止し、業務を掛川の本店に一店に集中して 経営の健全化を図ることとし、静岡支店は愛知銀行に営業譲渡の形をとり 東京支店もまた愛知銀行に譲渡され、訴訟など貸付の後始末には少なからぬ損失のまま決着は十年七月に及んだ。

三年七月に 突如として欧州の一角で勃発した第一次世界大戦で、開戦当初の四年は戦乱で貿易が不振、輸出の減少と業界の先行き不安から動揺し、生糸が、続いて米価が暴落したが短時間で回復、五年より軍需産業。海運・貿易などで莫大な利益を得、戦乱の局外にあった わが国は資本主義の大発展し 開国以来始の大輸出超過となった。当地方の産業の製茶輸出も 五・六・七年と空前の活況を呈し 茶業の利益は増加した。物価が上昇したのは四年から、米価は五年からで、これより七・八年にかけて高騰を続け、八年を絶頂として米価は四年の三、六倍、繭価は四年の三、二倍に騰貴した。こうした高騰に比べて一般の物価や労賃は対比的に低く、市民生活を圧迫し、七年の夏全国的な米騒動が起こった。しかし農産物の価格の上昇は一般物価の上昇ほどでなく、物価騰貴は農業生産を中心とする当地方の経済をかなり潤すことになった。

## 大正中期より昭和初期 衰退と整理へ道程



日本経済に空前の好況をもたらした第一次世界大戦は、空前の好況をもたらした七年(1918)十一月に終戦となり、一時的な経済の混乱を見せ、金融の逼迫 茶価は暴落したが、八年より九年にかけ戦争中に優る好景気をもたらした 事業が勃興し、一般物価は九年には戦争中の五十%も高騰、景気の波に乗って金融業界は資力と業容を拡大したが、景気の上昇も海外では、欧州の復興難と世界的な物価高とアメリカでのインフレの影響によるもので、わが国では投機的な空景気だった。この反動で 九年三月から株式が暴落し 恐慌になり 九年中は企業の倒産と銀行の休業が相次いで起こった。この不況は十二年まで続き 当地方の経済にも深刻な影響を与えた。

大正九年・昭和二年と続いた恐慌によって全国の主要銀行は大きな打撃を受け、それに続く長期の不況は 地方銀行にも深刻な影響を与え、経営を極めて困難な状況に追い込まれた。九年の恐慌から中小銀行が経営不振になり、十年以降は地方資産家が資力を結集して築いた掛川銀行をはじめとする地方の弱小諸銀行は衰微の一路を辿った。

当地方の主要産物である製茶は、戦時中 滞荷していたインド茶が海外市場に一度に流出し 茶価が暴落、加えて十・十一年に米国で日本茶輸入拒否事件があり 業界に大きな衝撃を与え、明治以来築き上げた茶業も、外国貿易を主体とした茶商も相次いで倒産するという事態を招き、これに続く輸出の不振は当地の経済に大きく響いている。

大正七年一月二十三日の定時株主総会で取締役と監査役を改選し 取締役に山崎百四郎・松本義一郎・河井重蔵・大庭審己・関林江茂(掛川町掛川四三五番地)が、監査役に鳥井俊三郎・鈴木九一郎・伊藤賢三(日坂町日坂三五番地)が当選就任した。翌八年一月二十三日の株主総会で監査役を改選し全員再選され重任した。十二月三十一日に監査役の鈴木九一郎が死亡している。九年一月二十三日の株主総会で監査役の改選を行い 鳥井俊三郎・伊藤賢三・山崎敬一(掛川町掛川五九五番地)が当選就任した。この日の総会で出資金の増額を決議した。四月十日 出資金の増加と存立期限延期について大蔵大臣の認可を受け、株式一株金五十円、資本金百万円とし、存立時期を明治十三年十月より大正二十九年九月迄六十ヶ年とした。八月に 取締役 山崎百四郎が死亡した。十年一月二十三日の定時株主総会で取締役と監査役を改選し 取締役に 大庭審己・鳥井俊三郎・山崎周五郎(掛川町南西郷八八番地)・河井重蔵・加藤定吉(東京市京橋区南鍋町二丁目五番地)と 監査役に伊藤賢三・関林江茂・山崎敬一が当選就任した。四月三十日 取締役 加藤定吉の住所を支那天律日本租界旭街四九番地 に変更し登記をした。

十一年一月一日をもって 貯蓄銀行法に伴い貯蓄銀行業務を廃止した。同月二十三日の株主総会で監査役を改選し全員再選重任。九月三日 取締役の山崎周五郎の住所を 掛川町掛川一四二番地と変更登記した。同月二十五日 増資の第一回払込を完了し、追加登記をした(九年一月二十三日総会決議により大蔵大臣の認可を得る)増加した資本は五十五万円(総額百万円)で、新株の払込株金額六十二円五十銭。十二月九日 (一月二十三日の株主総会で決議した)定款の大蔵大臣の認可が達した。変更の内容は(1)諸預り金及貸付(2)手形割引及取立(3)為替・社債・有価証券の売買・公社債及び株式の事務並に引受、保護預り、手形の引受、債務保証、出納事務の代理及び他の銀行会社代理店事務、前各号の外、銀行業に付帯する業務としている。十二年十二月二十四日監査役の伊藤賢三が死亡した。

このような不況のうち、十二年(1923)九月一日 突如関東を襲った大震災は史上かつて



ない被害をもたらし、東京市中の金融機能は停止、経済界の混乱を巻き起こしたが、十月一日よりようやく復興に向かった。しかし経済的基盤の脆弱な我が国では震災以来昭和初年まで慢性的な不況になり、昭和二年全国的な金融恐慌になった。これに続く世界恐慌、地方の不況は銀行経営を更に困難にした。その過程で弱小地方銀行は没落し、吸収されるものは吸収されて有力銀行を柱とする地方銀行に再編成されていった。

## 震災後と金融界の変動・地方銀行の再編成

当地方の不況は、大正十三年(1924)より急激に顕われ、十四年より経済活動を低下し、昭和四年より六年にはその機能を停滞し最悪な状態になり倒産者を出した。大正十五年発行の『郡勢要覧』に当時の銀行の模様を述べ「本郡銀行数は大正十三年末に於て十八行を算し(中略)外に十支社ありて金融機関は殆んど完備に遜きが如し、然れども往年所在小銀行の設立あり、その数三十有余を数ふることありしも、経済界の変動と共に営業不振に陥り、破綻に瀕せるもの相踵ぎ、自然に淘汰せらるるに至り」と記している。

この十三年より当地方は不況で預金・貸金とも減少の一途をたどり、昭和二年の金融恐慌に致命的な打撃を受け経営を更に困難にさせた。地方銀行の経営難が「経営者の拙劣」とか「努力の不足」というよりも、地域銀行が狭隘な地域の地元銀行であるかぎり、近代銀行への発展は不可能だという経営的矛盾を地方銀行の経営者が意識し始めた。

大正十三年一月二十三日の定時株主総会で取締役と役監査役の任期満了で改選し取締役には河井重蔵・大庭審己・鳥井俊三郎・加藤定吉・山崎周五郎が、監査役に山崎敬一・伊藤文一郎(日坂村日坂三九番地)・鈴木理一郎(東山口村伊達方五七四番地)が当選就任した。四月九日に監査役の鈴木理一郎は掛川町長と兼務の不都合から辞任し、七月二十一日の株主総会で監査役の補欠選挙が行われ黒田由松(平田村下平川二三三番地)が当選就任した。十四年一月二十六日に取締役の河井重蔵が死亡した。十五年一月二十三日の株主総会で取締役の選挙を行い榛葉嘉作(栗本村初馬二二六九番地)が当選就任し、監査役の改選では全員が再選重任した。同年六月一日取締役の山崎周五郎が山崎順一郎と改名したので氏名変更の登記している。

大正末から昭和初年農村の地方銀行は経営が極めて困難な状況に追い込んだ。預金の伸び悩みと融資の固定化、特に不動産担保の融資が累増し、流動性に欠くことが共通の悩みで、この解決は地方銀行の体質強化が課題だった。担保不動産の非流動性は不況期を何度も経験し担保物件の流動化の必要かを知らされた。経営環境は変化しても資産が流動化すれば脆く倒産は避けられたに違いない。昭和元年の統計では地方銀行の総貸出の平均四割は不動産担保貸出で、農村を地盤とする地方銀行では五～七割がそうだった。不動産担保貸出が多かったのは個々の事情はあったが多くの農村金融的な商業金融から出発し、地域と結び付きが強いほど商業銀行だけで発展する余地が狭められ、不動産貸出が増え資金の固定化と不況下での不動産の値下がりによる二重の苦境に追い込まれた。

この解決は地方銀行の体質強化の共通した課題で、地方銀行の経営難は「経営者の拙劣」とか「努力の不足」よりも、地域銀行が狭隘な地域の地元銀行であるかぎり、近代銀行への発展は不可能という経営的矛盾を地方銀行の経営者が意識し始めた。

この間本行は常に一行を保ちつづけてきた。多くの地方銀行が設立或いは合併・廃止と盛衰を繰り返し広げたが、昭和初年来大蔵省の指導もあり、小笠郡下の小銀行が合併して協



和銀行を設立し、吸収発展を見た。当行も 協和銀行に合併 或いは掛川商業銀行との合併の話も上がったが 内容条件に問題があって自力での整理が続けられた。

昭和二年(1927)二月 中央政界で震災手形の処理問題をめぐり 銀行の経理内容が弱体で その不健全な姿を暴露されると 民間の不安をかり立て 銀行取付けがあり 東京市内で休業銀行を出した。こうした事態に監督当局では銀行の合併強化を勧め 更に新銀行法を公布し、五ヶ年の猶予期間内に合併又は資力を増加させ銀行事業の強化を計った。しかし四月十七日 震災手形問題で若槻内閣が総辞職すると 民間の金融不安は業界に大打撃を与え動揺をもたらし、四月二十二日より二日間全国銀行が資金準備のために一斉休業という事態となり、政府は取引に対し支払猶予令を実施、ようやく安定を取り戻し 二十四日一斉に開業して事なきを得た。こうした恐慌は 当地方においても資本金が少ない 経営の不完全な 弱小銀行は信用を失い、預金者は浜松・静岡に本店を置く資力の大きな有力銀行の支店を利用するようになり、地方の資金はこうした銀行に吸収され衰微の一途を辿った。

昭和二年一月二十三日の株主総会に取締役任期満了で改選し 取締役に大庭審己・鳥井俊三郎・加藤定吉・山崎順一郎・榛葉嘉作が当選就任した。八月二十三日に監査役の黒田由松が辞任し、三年一月二十三日の株主総会で監査役の改選を行い 山崎敬一・伊藤文一郎・山崎好知(垂木村下垂木二五八二番地)が当選就任した。十一月十九日に監査役の伊藤文一郎が辞任し、四年一月二十三日の株主総会で監査役の補欠選挙を行い 鈴木運貞(周智郡飯田村飯田一一〇番地)が当選就任した。十一月十五日に取締役 榛葉嘉作が辞任している。

### 新銀行法に基づく指導・整理解散への道程

昭和二年の金融恐慌以来 悪化した農村経済は 四年の大恐慌と五・六年をどん底とした農村恐慌で深刻を極めた。世界恐慌で海外需要が減退し、生糸・製茶の輸出の不振、繭相場の大暴落と共に 以来数年 米価の暴落から豊作飢饉を招き、都市は失業者があふれ 農村は窮迫して農業は職業でないの感を呈した。六年に入ってもこうした状態が続き この年は凶作で 不況は一層深刻化し、四年の大恐慌とこれに続く農村恐慌は地方の経済に大打撃を与え 弱小地方銀行の経営基盤を完全に失わせた。

三年一月(1928)から新銀行法の施行で、地方銀行は人口一万人以上の地域に本店を置く銀行は資本金百万円以上、一万人未満の地域では五十万円以上に規制され 銀行の合併を促し、小笠郡下の協育銀行・加茂銀行・千浜銀行・大坂銀行・西大瀬銀行の五行が三年七月に合併して協和銀行を設立した。掛川地域の銀行は合併に適当な条件を持たず、三年五月に日坂銀行は解散、良純社銀行は同年 山口銀行(山口実業銀行)と改称したものの六年九月に解散し、四年十月に上内田銀行は内田銀行と合併した。掛川町内の掛川銀行・会信銀行・掛川商業銀行はともに合併強化を図る条件も意図ももたず、各自事業内容の整備に力を入れたが、四年の大恐慌とこれに続く農村恐慌は地方の経済に大打撃を与え経営基盤を完全に失わせた。

四年(1929)三月に 当行へ大蔵省の実地金融検査があり 綿密な調査と実務の不行届の指摘をうけ経営の改善を命ぜられた。大正十四年以来 不確実な債権と不動産の処分の必要を認めながら財界の不況から整理が思うように進行せず その後無配当を断行し 五年上期より損失を計上し、次いで六年四月に 検査があり (1)資産中の欠損見込み額 固定額 要整



理額を指摘 速やかに整理すべく (2)新旧重役・行員への不良貸出額が多く整理するよう (3)所有不動産が多く 速やかに適当な整理を (4)最近期末決算にある架空預金の粉飾報告を慎むこと 等を厳しく指摘され、答申と改善の報告 毎月の整理状況報告の提出を求められた。経営方針として 三年以来 県と大蔵省から 会信銀行・掛川商業銀行と合併の勧誘があったが資産整理がはかばかしくなく、また五年十月資金調達の困難から県庁に申し出て協和銀行との合併を考えたが意見の一致を見ず、六年二月 大蔵省の招集で 会信銀行・掛川商業銀行に二行との合併 若しくは三行合併と同時に協和銀行への合併 又は当行くが単独で協和銀行への合併がとりただされ いずれにても異議なき旨答申した。

五年(1930)一月二十三日の株主総会で 取締役と監査役の改選があり取締役は大庭審己・鳥井俊三郎・加藤定吉・山崎順一郎・今井垣(掛川町掛川六六番他の二)が、監査役に山崎敬一・山崎好知・鈴木運貞が当選就任した。七月二十二日に監査役 山崎敬一が辞任し、六年一月八日に 監査役の鈴木運貞が辞任し、二十三日の株主総会で監査役の補欠選挙が行われ 松浦伝吉(西郷村五明七七番地)・山崎保平(雨桜村家代六四五番地)が当選就任した。八月三十一日に取締役の今井垣が辞任し、この年十二月五日 業績不振で協和銀行との合併談の不成立を機として同日 休店している。

六年十二月から翌七年四月にかけて愛知県下を中心に長野・岐阜・静岡各県下の広範囲にわたり地方金融の動揺があり、弱小銀行の経営を困難にし、当地域でも、七年五月に会信銀行が、八月には掛川商業銀行が相次いで解散し、翌八年に新銀行法が施行され五ヶ年の猶予期間が満了して小笠郡下には、掛川銀行・協和銀行・内田銀行・池新田銀行の四行が残った。

深刻化した不況に対して、政府はインフレ政策と大陸の軍事行動で需要の増大をねらい景気の回復を図った。こうした軍需経済の時代となって 七年秋より物価の上昇と軍需産業が拡大し、八年より軍国主義の様相を呈し、通貨は地方にも還流したが、直接軍需産業に結び付かない当地方の産業は進展を見せず、資金の需要もこれに伴うことなく、浜松・静岡に本店を置く銀行に吸収され、地域の経済活動には見るべきものはなかった。

七年(1931)一月二十三日の株主総会で 取締役・監査役の補欠選挙を行い 取締役は山崎保平、監査役に早川睦美(中内田村中内田四〇番地)が就任した。九月三十日に取締役 加藤定吉が辞任。八年一月二十三日 の株主総会で取締役を改選 大庭審己・鳥井俊三郎・加藤定吉・山崎順一郎・山崎保平・宮崎藤次郎(掛川町掛川四五五番地)が当選就任した。同年十一月二十日 取締役 山崎保平が辞任。九年一月二十三日の株主総会で取締役の補欠選挙を行い 加藤安吉が当選、監査役は再選重任し。十二月十八日に 取締役 鳥井俊三郎が死亡している。

## 解散 協和銀行への資産譲渡による終局

最後まで掛川に本店を置いた掛川銀行は種々の対策にも拘わらず、昭和十年(1935)一月の総会の決議により清算されることになり、明治十三年以来五十六年の地方銀行の歴史の幕を閉じ、掛川地域の銀行は浜松の遠州銀行と静岡の三十五銀行の支店のみになった。

昭和十年一月二十日 定時総会で解散を決議し、二月八日に大蔵大臣の認可を得て解散した。三月十三日に監査役の早川睦美・戸田浜雄・山崎好知が辞任、三十一日に株主総会を開いて清算人三人を会員の決議で選挙し 山崎好知(小笠郡桜木村下垂木二五八二番地)



・戸田浜雄（曾我村高御所三七四番地）・早川睦美（中内田村中内田四〇番地）が当選就任した。また監査役の補欠選挙を行い 榛葉和吉（小笠郡東山口村千羽八八三番地）・亀井恵作（掛川町掛川七四〇番地）・伊藤誠太郎（曾我村梅橋三番地）が当選就任した。十一年一月二十一日に 監査役の改選を行い全員が重任した。十二年三月十五日 清算人の決議により 三月十八日に監督官庁の許可を得て同月二十九日より本店を掛川町掛川四七六番地に移した。この年清算人の山崎好知は辞任、十三年一月二十六日監査役の満期により再選し全員重任した。十六年三月十二日に清算人の早川睦美が死亡している。

昭和十七年(1942)一月二十日をもって清算を終了した。清算人は宮崎藤次郎（掛川町掛川四五五番地） 加藤安吉（小笠郡土方村上土方九五番地） 大庭審己（和田岡村吉岡九四一番地）で二月三日に清算終了の登記をした。

### おわりに

種々の対策にも拘わらず、遂に昭和十年に解散に追いやられ、資産を協和銀行に譲渡する事により株主と取引客への清算し果たして、五十六年の歴史を閉じた。

掛川銀行のなきあと、戦時下にあっては統制経済のもとに金融も統制の枠にはめ込まれ、国策から一県一銀行という金融政策が進められて、県下では静岡・駿河・清水の三行となり、国策金融として資金は重点的に戦費の調達と軍需産業へ集中され、民間資金の吸収と国債の消化等に力を入れられた。当地域にあっては軍需産業に結び付く事業もなく、経済活動も衰微の一途を辿り、昭和二十年の終戦を迎える。

〔あとかき〕 まだ銀行が一般に普及しない時代 掛川の先覚者達が 地方産業の増進・地域経済の振興発展を目指す全国屈指の大銀行を創業しましたが、その後の時代の趨勢に阻まれ、明治二十年代の中半頃を峠に衰退への道を辿ることとなります。出発点の製茶と東北の生糸の輸出という農村振興に根差したもので、近代産業として商工業の金融機関にならず、その発展が見られなかったこと、貸付金の焦げ付きや、担保不動産の整理が捗々しくなく、当時の地方弱小の銀行と同様 既に明治三十年代より経営不振と背中合わせになり、改善と整理を図りましたが 大正末より昭和初年の金融恐慌から 経営困難になり 昭和十年に解散しました。

今日では忘れ去られてしまった先人の努力と苦心を偲び、今日では 昔とは違った形で、次々に起こる大きな経済変動から私共の経済生活の上に何らかの役に立てばと取上げまいた。

平成25年12月21日 関七郎



私の実父、山崎覚次郎は明治元年6月15日静岡県小笠郡掛川町で祖父徳次郎の長男として生まれた。（明治と改元されたのは同じ年の10月25日であるから、正しくは慶応4年である。）幼少の頃、佐野郡（今の小笠郡）倉真村の素封家岡田良一郎氏（淡山翁）の経営する私塾「<sup>北</sup>北学舎」に学んだ。

<sup>北</sup>北学舎は二宮尊徳の教えを受けた良一郎氏が、主に英語の学習を目的として創立したもので、明治10年から17年まで開設された。同窓生152名中には、後に長く文部大臣を勤め、理科教育史では功労者として必ず名を挙げられる岡田良平氏及び 宮内大臣、<sup>京都帝国大学総長も勤めた</sup>枢密院議長等の要職を歴任した一木喜徳郎氏の兄弟がいる。（共に岡田良一郎氏の子息である。）一木喜徳郎氏は私の養母尾崎家子の父であり、また岡田良平氏の邸宅は山崎覚次郎宅のすじ向かいにあった。（東京市小石川区原町125番地および126番地、今の文京区白山4-12、8）

<sup>北</sup>北学舎では、塾生は岡田良一郎氏の自宅で寝食を共にし、午前4時起床、掃除、耕作を日課として日常生活を厳しくしつけられた。学科は漢学、詩文、歴史、英書講読等で、明治15年頃には全国的に有名になり東京、鹿児島からも遊学者があった。当時の「英書目録」が現存している。（山崎覚次郎著 「貨幣瑣話」昭和11年、有斐閣）

父は明治15年上京し、東京大学予備門を経て同18年東京大学法学部（後には法政学部）政治学科に入学した。（19年に東京大学は帝国大学となった）同22年帝国大学法科大学政治学科を卒業、大学院に進み経済学を専攻した。

上京してからしばらく、静岡県磐田郡掛塚町出身でいここに当たる丘浅次郎氏（当時は帝国大学理科大学動物学科の選科生）と共に、後年の文豪坪内逍遙氏の寄宿していた神田区猿樂町の下宿に同居していた事があった。その間、父は逍遙氏から<sup>北</sup>北学舎では充分学べなかった英文法や数学の指導を受け、そのお蔭で予備門の入学試験に合格することができた。また逍遙氏から見事な英文で書かれた大学の講義のノートを譲り受け、大変助かったそうである。このノートは父が50年間保存し、氏の逝去後早稲田大学演劇博物館に寄贈した。また後の高名な評論家長谷川如是閑氏も最年少であったが同じ下宿にお



られた。後年、ある会合で長谷川氏と同席した時父は、既に老齡白髪のご本人を前にして、「長谷川君はこんな小さな子供だったよ」とテーブルの上に手を挙げたので、一同爆笑したそうである。（司馬遼太郎著「街道を行く」37、「本郷界限」平成4年朝日新聞）

丘浅次郎氏は後に東京高等師範学校動物学科教授となり、学士院会員に推薦された。当時のベストセラー「進化論講話」の著者でもあり、理科教育についても優れた独自の見識を持っておられた。（岡部昭彦著「科学者点描」平成3年みすず書房）

父は明治24年より4年間、丘氏と共にドイツに私費留学をした。帰国後は帝国大学工科大学講師、東京高等商業学校（今の一橋大学）教授を勤め、明治35年東京帝国大学法科大学助教授、同39年教授に任ぜられた。（明治30年京都帝国大学創立と共に「東京」帝国大学となる。）38年博士会の認定により法学博士の学位を授与され、大正2年帝国学士院会員となった。同8年3月「東京帝国大学経済学部新設準備委員」となり、同じ静岡県出身（磐田郡見付）の金井延教授（初代学部長）および戦後NHK会長となった高野岩三郎教授等と共に学部創設に尽力した。同年5月経済学部が発足し、同時に東京帝国大学はそれまでの「分科大学」を廃止し、今の「学部」制に変わった。父は貨幣論、銀行論を担当し、大正9年から12年まで学部長に選任され、昭和4年定年退職した。

その間、東宮職御用係、宮内省御用係に任ぜられ、昭和3年1月昭和天皇に「洋書御進講」を申し上げた。また私の母方の叔父貴族院議員、日本赤十字社役員、中央大学教授桑田熊蔵が設立した「社会政策学会」にも関係し、その「保守派」を代表していた。東大退職後は中央大学に招かれ、経済学部長兼商学部長を勤めた。陸、海軍の経理学校にも出講していたようである。

昭和14年2月 東大総長平賀譲先生より「東京帝国大学経済学部再建に関する事務」を委嘱された。昭和6年9月に起こった満州事変以後、東大経済学部では、学外の右翼勢力と結び自由主義又はマルクス主義を主張する教授を追放して学部の支配権を独占しようとする土方成美教授一派と、それに対抗するグループとが長年にわたり抗争を続け、事ある毎に反目して学部の正常な運営が妨げられてきた。歴代の総長、学部長はその解決に頭を悩ましつづけていたのである。平賀総長は海軍造船中將で、戦艦陸奥、長門の設計者として世界的に知られた技術者であるが、同時に長年工学部造船学科教授を兼務し、後進の育成に努力してきた。海軍退任後は大学教育に専念し、工学部長も勤めた。昭和



13年3月大学を定年退職し名誉教授となったが、悠々自適の暇もなく、病弱で過労のため倒れた長与又郎総長の後を受けて、12月衆望を担い第13代総長に就任したのである。

翌昭和14年1月総長は充分根回しをした後、経済学部の方成美および河合栄治郎両教授について、学部内派閥抗争の責任者として「休職処分上申書」を荒木貞夫文部大臣に提出した。このような人事措置は歴代総長が未だかつて行なった事がなく、これを新聞等では「平賀肅学」と呼ぶようになった。文部大臣が上申書を受理した結果両教授は休職となったが、両派に属する助教授、講師が教授にしたがって一斉に辞表を提出するという事態が起こった。大部分は総長の慰留により辞表を撤回したが、数名はなお辞意を変えなかった。そのため大学は欠員を緊急に補充する必要がおり、父が再建顧問を委嘱されることになったのである。そのことをマスコミには「古釘のご奉公だよ」と言っていた。結局、総長の卓越した行政手腕と森莊三郎教授、橋爪明男助教授以下の適切な補佐により、4月始めには派閥抗争のため停滞していた学内の昇任人事が発令され、学外からの招へい者の人選も終わり、新しい経済学部が無事発足したのである。（内藤初穂著「軍艦総長平賀譲」昭和62年、文芸春秋）

「平賀肅学」については、かなり強い批判もあったが、他の帝大の学長等から多くの賛辞が寄せられた。また後年、一流企業のトップとなった当時の学生が「肅学の後では新進気鋭の若手教授あるいは学外から来られたベテラン教授等の優れた指導を受ける事が出来て非常によかった」という感想を述べており、結果的には大成功と言えよう。

父はその後、日本銀行の政策委員や学術会議議員を勤めたが、昭和19年春、九十九里が浜の南端、千葉県長生郡太東村字中原の別荘に疎開し、20年6月28日肺炎のため死去した。（東京帝国大学経済学会編「経済学論集」第15巻第5号、山崎覚次郎博士追悼記念号、昭和21年5月1日発行、有斐閣）

神戸正雄東大名誉教授は昭和21年11月12日、帝国学士院総会において次のような追悼演説をされた。

「・・・・山崎覚次郎、塩沢昌貞両君の霊に対し哀悼の辞を捧げる次第であります。・・・・両君にはかなり共通した類似点がありました。身体が小柄で、柔和、謙譲で落ちつきがあり、人好きのする型の人であり、聖人君子という風格の持ち主でありました。人を譴責したり、怒鳴りつけたり、人中で出過ぎたりするような事はありません。・・・・



・山崎君は日本国中の全経済学校、なかでも特に官立大学系の最長老として、また塩沢君は私立大学系の学者の長老として、いずれも全学徒の崇敬の的となっておられました。山崎君がその晩年に崩壊に瀕した東大経済学部の再建を成就し・・・・・・両君はいずれも経済原論即ち経済の基礎理論を専門とし、山崎君は特に貨幣論において独壇場を持って居られ、経済政策においても、金融論、銀行論において他人の追隨を許さぬ高い見識を持って居られた。・・・・・・銀行券の発行方法においては山崎君の説の一部が採用された。・・・・・・筆無精で著書、論文は少なかったが、皆光っており宝玉でありました。文献を入念に調べ、いやしくも結論を軽々しくしなかつた。・・・・・・石橋を叩いて渡る手堅さには敬服の他ありません。・・・・・・（日本学士院編「学問の山なみ」第2）「学問の山なみ」は、学士院会員死去の際、慣例として総会で行なわれる追悼演説をまとめたものである。経済学部の大内兵衛先生は、その著書（「経済学50年」昭和34年、東京大学出版会）の中で、先生がまだ学生であった頃の経済学部の諸教授の印象について次のように述べられている。「一番良かったのは田尻先生であるが、その次に真面目で良い先生は山崎覚次郎先生であった。・・・・・・」

父の蔵書は千葉県に疎開する時に兄が東大に寄託したが、その中の多数を大内先生が買い取られた。その一冊に父が講義の際に使ったテキストがあり、これには他の文献や資料から引用した文章が無数に書き込まれていたそうである。父は極めて保守的な思想の持ち主であり、大内先生によれば、矢内原忠男教授が外国語経済学のテキストとして「資本論」を採用することを教授会に提案した時に、父が非常に驚いて、「資本論は穏当でないから他の本に変えたほうがよい」と強く主張したそうである。

東京都知事、法政大学教授、東京教育大学教授だった美濃部亮吉氏はその著書「苦悩するデモクラシー」（昭和34年、文芸春秋新社）の中で次のように述べている。「山崎先生は真面目な学者であり、貨幣論に関する造詣はまことに深かった。しかし、どちらかというと保守的にものを考える傾向があり、若い学者達が社会主義の方向に向かうのを憂慮し、かつ苦々しく思っておられたようである。・・・・・・〔経済学研究〕（東大経済学部機関誌）創刊号（大正8年12月）に載った森戸辰男助教授の論文「クロボトキンの社会思想の研究」について、山崎先生はいちはやく”あの論文はどうもよくないように思う。不穏なことが書いてあるようだから本を配るのはやめようではないか”と言われ、一同そ



の唐突さに驚いた。」森戸助教授は、結局、クロボトキンが過激な無政府主義者であったことから、論文の内容はそれほど問題にすることが無かったにも拘らず、学外の右翼勢力の攻撃する所となり、裁判で禁固3ヶ月、罰金70円を科せられた。（森戸事件）

前学士院長脇村義太郎先生は、その著書「回想90年」（平成3年、岩波書店）の中で「経済学部之最長老の山崎覚次郎先生は、本に関しては有斐閣一辺倒だった。……私の学生時代の下宿は小石川の原町、植物園の界隈だったが、近くに経済学部の長老山崎覚次郎先生が住んでおられた。……（地図添付）……三高時代の「法政経済」の授業では山崎覚次郎先生の「経済原論」を教科書とした……」等と述べておられる。

本年、50回忌に当たり、父についての小文を記した次第である。

（終）

## 金井先生を憶ふ

山崎 覺次郎

教場に於て講義を聴いたと云ふやうな直接の師弟関係はないが、後に述べるやうに、同郷の先輩であり、而も多年指導を受け、絶えず誘掖に預り、又數ば推輓を辱うした私としては「金井先生」と呼ぶのが當然であらう。

先生の生れた見附町と私の郷里掛川町とは同じ遠州で、相距る僅に數里に過ぎないが、先生は早くも明治六年に上京されたので、私が先生に親炙することになつたのは、私も東京に出て來た明治十五年以後のことである。

同年に私は東京大學豫備門に入學したが、當時先生は既に本科即ち文學部の第二年生であり、而も私は寄宿舎に居らなかつたから、先生に面接することは稀で、同郷學生の組織して居つた「遠江會」に於て時々先生の警咳に接する位に過ぎなかつた。従つて、先生の學識人物などに就ては深く識る所なく、當時の先生として私の記憶に残つて居る印象は、「金井教授在職二十五年記念最近社會政策」の跋に於て新渡戸博士の述べて居るやうに、「光澤ある眼に聰明なる知性と精悍なる氣宇とを現し」、「破れ袴に汚帽の出立ちで太き棒を提げ、肩を怒らして闊歩」する元氣潑刺な青年に他ならぬ。而して先生は明治十八年に海外に留學、同二十三年の末に歸朝せられたが、今度は私が同二十四年二月に渡歐したので、再び先生に接近する機會を失つた。併しながら、出發の際、ハレー大學のコンラード教授へ宛てた懇切な紹介狀を私に與へられ、同教授が外國の一學生を晚餐に招待する程親切に待遇して呉れたのは全く此紹介狀の賜である。



私は明治二十八年の秋に歸朝したが、先生に面會することの頻繁になつたのは「社會政策學會」が成立してからである。社會政策を我國に於て始めて提唱したのは實に先生で、大學の教壇に於ける先生の講義は當時の學生の少くとも一部には多大の感動と興味を與へ、是が「社會政策學會」の出來た一原因と云ふてよろしい。同會の發起されたのは、拙著「貨幣瑣話」に於て述べた如く、明治二十九年の春で、最初は其同人も數名に過ぎなかつたが、同年の末に先生を迎へて參加を請ひ、其後會員も増加し會の組織が整つてからは一同から推されて先生は事實上會長のやうな地位に居られ、毎年開かれた大會に於ては多く先生が開會の辭を述べられた。

私の一生に決定的方向を與へられたのは實に先生で、先生微りせば私は帝國大學の教授とはならなかつたであらう。回顧すれば、明治三十五年の春、東京法科大學に於て經濟學の助教授を置くことになつて、或人が其候補者に選ばれたが、一身上の都合で此人は中途で之を斷念するに至つた。そこで私に白羽の矢を立てたのは主として先生であつた。當時私は浪人であつたが、實業界に入り殊に銀行に勤務したいと云ふ從來の志望を有つて居り大學教授は初から其任に非ずと信じて居つて、大學に就職しようと云ふことは、私の念頭には一度も浮んだことはなかつた。従つて先生の折角の好意も之を固辭したが、再三の勸諭に動かされ、其他に退引ならぬやうな事情もあつて、遂に候補者となつた。而して同年五月一日の教授會に於て先生が提案者となつて私の採用を主張され強力な反對のあつたに拘らず、兎に角私は詮衡に及第したと云ふことである。爾來二十五年大學に勤務して居つた間には幾多の問題があつたが、私はいつも先生の指導に従つて行動したので、例へば、經濟學部の創設の際の如き、先生の驥尾に附して微力を致したのである。上述の大學へ就任の外、先生が私の爲めに裏面に於て推輓の

勞を取られたことは數回に及ぶと想像する。之を思ふと、先生に對する感謝の念はいつまでも盡きないのである。

日本のアダム・スミスは誰であるかと、嘗て或人から問はれたとき私は無いと端的に答へた。アダム・スミスは佛蘭西、獨逸、米國其他にもなかつたので、日本にないのは當然であり、従つて少しも恥づべきでないと思ふ。

英國以外の諸邦に於てはそれぞれ其國の學者が早くから立派な獨創的學說を樹立して居つたのではなく、第十九世紀の初にアダム・スミスの經濟學を輸入したのであるから、歐米の學問制度等の移植に絶大の努力を拂はねばならなかつた我國の明治の初期は勿論、中期に於て本邦特有の經濟學の現はれなかつたことは怪しむに足らぬ。現に今日でも外國の學界の視聽を惹くやうな經濟學說は、残念ながら殆ど見當らぬではないか。要するに、金井先生も我國のアダム・スミスではない。併しながら、茲に注意すべきは先生が輸入し又普及せしめたのは主として獨逸の經濟學即ち、ワグナーなどの學說である。此點に於て先生は實にパイオニアであり、而も社會政策の思想を最も早く我學界に注入したのは先生であることは義に述べた如くである。

先生が其保持する學說に忠實であつたことは、金本位制採用の前後に於ける先生の態度が之を明示する。明治二十六年から同二十八年に互る貨幣制度調査會に於て、先生は金銀兩本位制を強く主張された。従つて、政府が愈よ金本位制を採用せんとするや、先生は極力之に反對し、演說等に於て之を發表した。當時先生は大藏省參事官を兼任されて居つたが、當局と其意見を異にした爲めに、潔く之を辭任されたのである。

かやうに其持論に忠實なることは、要するに、先生の高潔なる人格の發露に他ならぬ。先生は正義の觀念の非常に強かつた人である。青年時代から氣骨稜々たるものがあり、晩年には主角は殆ど見られなくなつたが、眠れ



Yamazaki Kakujiro

## 山崎覚次郎の貨幣論

わが国ノミナリストの先駆者



平成一〇（一九九八）年四月に東京から大阪に転勤した筆者にとって残念なのは、東京古書会館（神田小川町）でほぼ毎週末に開かれる古書展に行けないことである。割合と値が安いため、すぐには読まないが、将来役に立つかもしれない本をここで買い漁ったものである。山崎覚次郎の著書も東京古書会館の古書展に足を運んで買った本が多い。

## ↑ 限界効用学説を導入

山崎覚次郎は明治元（一八六八）年に静岡県で生まれた。明治二二年に帝国大学法科大学政治学科を卒業して大学院に進学、二四年二月から二八年十一月までドイツに留学した。帰国後、工科大学講師や高等商業学校教授、父親が経営していた掛川銀行取締役などを経て、明治三五年に東京帝国大学

法科大学助教授に就任、主に貨幣論と銀行論の講義を担当した。田尻稲次郎、松崎蔵之助、金井延を東京帝国大学における経済学の第一世代とすれば、山崎は高野岩三郎、河津運、矢作栄蔵らとともに第二世代に当たる。明治三十九年に教授に昇進。停年により昭和四（一九二九）年に退官したが、一四年の「平賀爾学」事件後は、東京帝大経済学部の再建顧問となり、混乱した学部の再建に一年余り従事した。経済学部長事務取扱を兼任した総長、平賀爾の要請があつたためである。この他、昭和六（一九三一）年と中央大学の商学部長を務め、一四年には日銀顧問を委嘱された。昭和一八年に創立された金融学会の初代理事会長にも就任したが、二〇年に他界した。

山崎は日本社会政策学会の創立時のメンバーの一人であり、シュルツェンゲーフアニッツの『大工業論』（一八九二年）を明治三六年に訳出している。明治三八年には法政大学での講義録『経済学』を出したが、これを基にして大正六（一九一七）年に『経済原論』を上梓した。昭和六年に全訂改版が出て、一三年までに版を八回重ねている。同書は、旧版が三六〇頁程度、全訂改版も二四〇頁足らずであり、当時の経済学の教科書の中ではコンパクトである。内外の文献からの引用や参考文献の提示はほとんどなく、著者自身の見解が披瀝されている。貨幣に関する解説が詳しいことに加え、経済の概念説明だけに終わらず、経済のメカニズムを科学的に叙述しようとしている点で、同時代の他の教科書にない特色を持っていた。

ドイツに留学した山崎は歴史学派の影響を受けていたが、『経済原論』の中では財貨の価値の根源を効用に求め、「単位一個ノ価値ヲ定ムルモノハ最小ノ効用即チ限界効用ナリトス」として、限界効

用学説を採用した。ただし、限界分析の意義や消費者の行動理論などには理解が及んでおらず、河合栄治郎門下の木村健康は「山崎博士は、限界効用理論の真義をまったく把握していなかった」（『東大風の中の四十年』昭和四五年）と厳しい評価を下している。

#### ↑痛烈なメタリスト攻撃論者

山崎の専門は金融で、この分野の著作が多い。貨幣制度に関する『銀行論』（大正五年）と『紙幣概論』（同十二年）、貨幣論教科書の好著『貨幣概論』（昭和四年）と『貨幣読本』（同八年）を出した。この他、貨幣をテーマとした様々な随筆や論考を収録した『貨幣瑣話』（昭和十一年）がある。三冊の論文集『貨幣銀行問題一斑』（明治四五年）、『若干の貨幣問題』（昭和二年）、『貨幣問題雑観』（同八年）は山崎の貨幣問題三部作であり、彼の貨幣論を理解する上で必読の文献である。彼は「痛烈なメタリスト攻撃論者」であり、一〇〇本近い論文を発表したが、内容的には半数近くが金属主義を採るメタリストの諸説への批判と名目主義理論の展開に帰着した。

貨幣理論には、貨幣の価値を金・銀などの金属自体が持つ素材価値に求める金属主義と貨幣の価値を素材価値ではなく交換手段や支払手段としての機能に求める名目主義との二つの考え方がある。一九世紀は金属主義が海外でほぼ通説となっていたが、一九〇五年に貨幣価値の成立を法律制度に求める有名なクナツプの貨幣国定学説が登場して、貨幣理論に大きな影響を与えた。欧米の学説の影響を受け、わが国でも例えば田尻稲次郎や堀江崋一、佐野善作等が金属主義の立場を取っていた。しか



し、日本における名目主義の先駆的な業績として明治三八年に左右田喜一郎の処女作『信用券貨幣論』が登場した。山崎は「左右田博士に遇いで『金属説』に対し反旗を翻した一人」（『貨幣瑣話』）と自認している。

明治三八年六月の「価値ノ尺度トハ何ゾヤ」（『法学新報』一五卷六号）で山崎は価値というものは必ずしも物質的効用にのみ起因するものではなく、紙幣が他の財貨と交換される力があるのであれば、その交換力の大小によつて紙幣の価値を定めることができるとの考えを示し、金属主義を暗に批判し始めた。彼が金属主義を明確に斥け、名目主義を積極的に唱えた最初の論文は明治四一年四月の「価値ノ単位トハ何ゾヤ」（『法学協会雑誌』二六卷四号）であつた。金地金はいつでも金貨を造ることができるから、金貨が有している価値を獲得する。貨幣が主であり、地金は従である。貨幣に含有される金と地金とがほとんど同額の価値を持つつを見て、金貨の価値は金の生産費に基づくとする当時の金属主義の考えを山崎は主従の関係ないしは因果関係が転倒した見解だとして強く批判した。

明治三九年末から四〇年にかけて福田徳三によつてクナップの学説が紹介され、山崎もクナップから影響を受けた。しかし、クナップが貨幣単位の名目性を強調するだけで貨幣の価値についてまで論及しないことに不満を持っていた山崎は、貨幣の価値を統一性と歴史性の二点から考えた。貨幣出現時の貨幣の価値は、交換の道具としてだけでなく金や銀が従来の装飾等に適するために有していた使用価値を持っており、金や銀の一定量と財貨が交換される関係が成立していった。しかし、一度貨幣の価値が成立すると、貨幣はすでに価値を有するが故に流通し、また流通するが故にその価値が維持

される。最初に用いられた貨幣の価値が歴史的に連続して現在の貨幣の価値となっているのである。貨幣の価値を歴史的産物としてその連続性を認めた山崎は金貨や銀貨、不換紙幣あるいは預金通貨など貨幣が数種類あつても、近代において整然たる貨幣制度が成立して各種貨幣間の代替性が完備すると、これらの各種貨幣は統一的一体をなすために、貨幣全体が普遍的な価値を持つことになると考えた。名目主義を採りながら、貨幣の価値の起源を金属の素材価値に求めた点で、彼の貨幣論はある種の二元論に陥っているが、統一的一体として貨幣は連続するという考えにノミナリスト（名目主義論者）としての山崎の特徴があつた。

政策提言的な論文は少なかったが、山崎は第十三代日銀総裁深井英五と同様、金本位制を万全な制度とはみないものの支持していた。貨幣価値を考える上で対内価値（国内における貨幣の一般的購買力）と対外価値（外国貨幣との交換率で外国為替に現れる）に分けて考え、金本位制の最大の利点を外国為替の安定をもたらしやすい点に求めたのであつた。金本位制はデフレに陥りやすいが、管理通貨制度にはインフレを招く危険性がある。彼は、インフレを警戒し、銀行券発行制度としては、比例準備法と発行総額の限定の併用を主張した。

#### ↑専門分野への特化

山崎の研究は貨幣の価値や貨幣制度に関するものにとどまり、貨幣が実体経済に及ぼす作用についての考察は皆無であつた。つまり、彼の貨幣論には貨幣経済論が欠けていた。大内兵衛や土方成美は

山崎の貨幣論の講義を評価したが、木村健康は金井、山崎、矢作の三人を「凡庸であるか、そうでなければ世俗的な人々であった」(前掲書)と酷評した。しかし、わが国の貨幣論史を振り返ると、先駆的に名目主義を導入した山崎の貢献は無視できない。

山崎の学術論文には具体的事例の考察が頻出する。彼は現実の経済問題に対して決して無関心ではなかった。しかし、山崎に続く世代の福田徳三が幅広い研究分野を持ち、経済論壇で活躍したのとは全く対照的に、山崎は貨幣論の研究に特化し、商業誌に書くことは少なかった。専門分野への特化を進め、アカデミズムとジャーナリズムを意識的に区別する今日のわが国理論経済学者の研究スタイルは、東京帝大における山崎あたりから始まったのかもしれない。



## 追 憶

## 山崎先生を偲ぶ

明 石 照 男

此の程、橋爪經濟學部長から、經濟學論集山崎先生追憶號を出すことになつたから、私にも何か書くやうにとのお話があつた。之に對して私は、元來學者の全生命は、その捧げられた學問の業績に在ると信するが故に、追憶號も亦先生の學問的回顧や批判を以て満たされたいのであつて、それには別に語るにその人がある筈で、學問に縁遠い私如きが言議を發するのは適當でないやうに思ふ、と言ふ意味のお答へをした。しかしながら、學外の人にも何か是非にとの重ねての御依頼に應じ、平素、先生の人格、行藏を仰慕する一人として、茲に聊か先生に關する追想を述べて見たいと思ふ。

私は、先生の帝大に於ける初弟子の一人である。是より先、先生には東京高等商業學校に於て教鞭を執られたこともあつたから、上田貞次郎博士等は同校に於ける初弟子であると、曾て先生の古稀祝賀會の席上述べられたが、帝大に於ては儘か明治三十八年の夏、グリップフィン師の逝去後、經濟學史の講座を擔仕せられ、之を聴講した最初が私共であつたかと記憶する。先生は當時は未だ助教授であつたので、經濟學演習などを擔當せられて居つて、その地位は聊か不遇であつた。それは先生には、學校卒業後、御家庭の緣故上、一旦父君の經營されて居た銀行に勤務せられ、それから學界に還入られたので、學者、もつと正確に言へば教師としての出發が餘程遅れて居た爲めで、この點金井



延先生の如き若くして花々しい門途とは正反對に洵に地味なものであつた。

然るに、大器晚成と評すべきか、獨逸留學中、その後大學助教授時代、孜々として奮勵せられた成果は、漸を追うて發揚せられて、それが我が國の經濟學全般に亘つてその進歩に貢獻せられたところ、如何に甚大であつたかは數々を要せぬ。就中、特にその通貨金融方面の研究に關しては我が國に於ては全く前人未到の境地を開拓せられた、而もそれが現代のいはゆる管理通貨制度の發展にも寄與すること多大なるものがあつたと斷しても決して過譽でなく、既に世人の等しく認めて居るところである。而して此等の點に關しては語るに適當な人が多いから一切省略することとする。

更に、帝大に於ける先生の功績についても亦別に語るに適任者があらうから、茲には敷衍を費さぬ。今は唯、經濟學部獨立の當初から、その創立者の一人であり、又學部の事實上の中心、後年は元老であつたこと、而してその受難時代に際しては、沈着重厚の中に温情と威嚴とを兼ね藏せられた先生の偉大なる人格に依つて破綻を免れ、今日在るのを待たしたことなどは局外者も悉く知悉して居るところであることを述べるに止める。

結局これは、先生が圓滿なる人格者にして、而も事に臨んでは毅然として信義を重んじ、是非を明斷し、至公至平の人であり、且つ又誰人に對しても恩怨で敵意なく、凡ての人に仁慈で親切な方であつた爲めである。而して此等の特長美點が常に學内のみならず、先生に近接する者殆ど總てに好感を抱かせたのであつて、このことは先生の全生涯を一貫して最も光輝を放つ人徳の一つであると思ふ。

先輩及後進に對して懇切であつた事例の一二を挙げれば、家事に煩る無煩着であつた同學の某先生の遺族の就職などについて、更によく行見いた面例を見られたのであつた。又先生から私に對して、或る學生の世話を依頼せられ

たことがあつたが、その在學中の成績は餘り芳しい方ではなかつた。先生はそれについて始終その人の爲めに解釋せられ、その心境は終するだにお氣の毒な程であつた。それで私も責任を感じて出来る丈の世話をしたが、その人も先生に似て大器晚成の質なのか、今日では最高學府の權威ある教授となつて居られるのである。これは一面、先生が學者を見出す優秀な眼識を有して居られたことを物語ると同時に、他面、飽くまで諄々として倦むことなく、感化せずんば息まざる熱情を以て指導誘掖せられた實ではあるまいか。

先生は帝大以外では中央大學に出講されたことがあつたかと思ふが、そんなことは極めて稀であつた。而して講壇を辭せられて後も、克く努力研鑽を重ね、長く著作や雜誌などの執筆に依つて、その成果を發表することを續けられ、學者としての操守は實に堅固で、學問に對する忠實嚴密な態度を持せられたことは深く敬意を表すべきである。加之、斯學關係の諸種の學會、財團、俱樂部などにも或は首腦者として、又はその一人として推戴せられ、學界の爲め、公共の爲め、盡瘁せられたところも亦益し尠少ではなかつた。これは前にも述べた通り、先生の圓滿にして而も毅然たる人格が自然、人をして推服せしめたが故であると思ふ。後年、私はかう言ふ方面では先生に面接する機會が比較的多く、且つ緊密であつたけれども、此等のことに關しては餘りに煩雜となることを恐れて一々挙げぬこととする。唯、日常俗事に忙殺せられ先生の門をくぐることの少かつた私は、斯かる會合に於て先生の人格に親しみ、高見を拜聴するのを特に楽しみにして居た。それは何となく慕はしく懐かしいからであつた。

これから、一層私事にも亘ることを御諒恕願ひたい。私は先生の親しみ深い弟子の一人と自認して居る者である。それなのに、元來俗物である爲めに、御振擲に背き御期待に副ひ得なかつたことが少くなかつた。これは眞に慚愧に堪へぬと共に、先生に對して深く陳謝しなければならぬ次第である。私が大學卒業後直に米國の經濟實務を習得する



爲め流行することになったとき、先生はその送別の宴に、金井延、松崎藏之助兩先生と共に三方御揃ひで御臨席下さつて色々激勵教訓の辭を賜はつたが、當時のお言葉は今猶ほ想ひ出すことの出来る程腦裡に刻み込まれて居て印象深い。その後私の獨逸留學中、時偶々、經濟學部の創立に當つて、私にもその教授になるやうにと、この時ミューンへンに来て居られた高野岩三郎先生が懇々伯林まで勸説の爲め枉駕されたことがあつたが、そのここに到るまでの學部内の事情は山崎先生の推挽に負ふところが多かつたやうに聞いて居る。私はこの勸奨に對して篤と熟考したが、天性學問的素質に恵まれて居ないとの自覺から、終に折角の溫情溢るる御高瞻に背いたことを在天の御靈に對し、この機會にお詫び申上ぐる次第である。しかし私は財界に在つても、時偶詰らぬ論文などを發表することもあつたが、これなどは經濟學政壇に於ける先生との接觸に依り受けた感化に負ふところも多からうと常に感謝し、その都度御叱正を乞ふと、何時も喜んでよく讀んで批判して下さつた。猶ほ同會に於て昭和二年の金融大恐慌後、その實狀を教訓とについて講演したことがあつたが、この時には先生や深井英五さんなどが聽いて下さつたので、私は何となく大學卒業試験を今一度受けて居るやうな氣持ちで一生懸命話つたことを記憶して居る。是より先、先生の還暦祝賀の記念論文集にも拙稿が採載されたのであるが、之もやはり大層欣んで下さつたことを痛しく回想する次第である。

先生の想ひ出を草するのには、斯く私事のみ觸れては甚だ恐縮で相濟まぬけれども、慕はしさの餘り、猶ほ今一つだけ記することを許されたい。それは不肖な私にも先生と類似したところのあることで、先生も私も家庭が賑かを通り越した寧ろ賑々しい程子供が多くて、而もその員數など似通つて居るといふことである。と言ふのは共に男子が六人、女子が二人で、その男子の一人はどちらも太平洋戦争で戦死を遂げたのである。中には同じ學校に通つた子供もあつて、こんなことでも先生とは話がよく合つた譯である。しかし先生の御子孫方は今は或は夫々の方面で十分活躍

され、或は御長孫があつて、而も御家庭は至つて順風順満で、昨年は此等の孝子順孫に圓饗せられて目出度く喜壽を祝はれ、又最近御球開後御臨終まで、文字通り天爵を蒙られ、天壽を全うせられたことを御長男の和一君から承はり、眞に頼稱なる大學者としての大往生であつただらうと信ずるのである。

若し夫れ先生の國家社會に貢獻せられた御功績に對しては、その酬いらるるところの餘りに薄いことは、之を客觀的に見るときは如何にも物足らぬと思ふ人が多いかも知れぬが、しかしながら先生は斯かることに對しては極めて無慾恬淡な學者であらせられるから、今頃は定めし靜かに天の一方にあつて、そんなことには頓着なく、寧々として「世界通貨の將來の動向」に關してでも深遠な思索を續けて居られることであらう。希くは先生の遺された最も貴重なる幾多の文獻、又その素材の一部を構成したであらう帝大經濟學部内に安置される莫大なる御藏書が幸にも戦禍から免れて悠久の生命を保ち、又先生の流風遺韻が永く學界に、悲いて財界その他にも波及せんことを衷心より祈念して止まない。先生の想ひ出は未だ／＼湧き出て盡きせぬものがあるが、拙稿は一應これで結ぶこととする。(昭和二十年八月十一日)



## 山崎先生のこと

安井琢磨

わたくしが山崎先生に親しくしていたとくやうになつたのは、周知の事件で山崎先生が東大経済學部と特別な關係をもつやうになられた昭和十四年春以來のことであり、しかもそれはわたくしが、山崎先生の御宅のごく近くに住んでゐたといふ偶然の事情に基いてゐる。先生が大學を退官せられたのは昭和四年、わたくしが大學へ入學したのはその前年であつて、學生時代には先生の銀行論の講義をすこしく拜聴した以外には全く關係がなかつたし、卒業後も同様であつた。昭和十四年に先生が經濟學部に對して役割を果されるやうになつた後も、もし我々が近所に住んでゐるといふ偶然がなかつたならば、先生は依然としてわたくしから遠い存在であつたらう。わたくしは先生のいはゆる「弟子」ではなく、また先生の著書から特に深い影響を受けた記憶もない。その上専攻を異にするわたくしにとつて、先生の貨幣論上の業績を検討して日本の學界におけるその功績を稱揚するといふことも仕ではない。それには他にいくらか適当な人がある筈である。わたくしと先生との關係は、いはゞ一人の後輩がたまたま地理的條件に恵まれたために、他の人よりも比較的多く一人の大先輩の晩年の聲に接することができたといふことである。わたくしの追憶記はこのやうな貧弱な基礎に立つてゐることをあらかじめ断つておかなければならぬ。

昭和十五年三月に先生の主著「貨幣銀行問題」一巻の第五版が發行されたとき、わたくしは先生の依頼を受けて少し校正のお手伝ひをしたが、その序文には次のやうに書かれてゐる。「本書は固より秩序立つた體系を備へて居ら

ぬ。併しながら、此處彼處に、或は明瞭に或は淡然ながら現はれてゐる一貫の連絡した思想がないのではない。それはメタリズムの否定とノミナリズムの肯定に他ならぬ」。まことに先生のいはれるやうに、ノミナリズムの立場に立つてメタリズムの排撃につとめることが、先生の全著作を貫く一本の筋金と見るべきであらう。先生はまた「メタリズムは我國に於ても長く一般の信奉する所であつたが、之に對して疑義を擧げ異論を唱へる者が明治三十年代の末頃から出現し、遂に多年占め續けた通説としての地位を失ふに至つた。之に反比例してノミナリズムは漸次優勢となり大正時代には既に多数の支持者を得たのである」と述べておられるがこのやうにノミナリズムが優勢となつたことについては、もとより外國の影響があるとはいへ、先生の努力に負ふところが大きいであらう。メタリズム對ノミナリズムの問題は最後まで先生の興味を捉へて離さなかつたやうである。すでに「貨幣瑣話」(昭和十一年)にも「金屬説の近時に於ける消長」といふ一章があるけれども、わたくしが時々お邪魔するやうになつてからも、話が貨幣論に及んだ場合、もつとも多く話題に上つたのはこの問題であつた。内外の經濟學者の噂をする際でも、何某がメタリストであるかノミナリストであるか、先生の第一の關心事であつたやうにおもふ。おそろく先生の最後の勞作ではないかと想像される「貨幣は果して價值尺度なりや」といふ論文(これは本誌に發表せられた)も、このやうな關心の下に書かれたものである。當時この問題に關聯して展々お宅に伺ひ、尺度といふことから測定と比較との一般的關係について先生といろいろ議論したことはわたくしの忘れ得ぬ記憶である。先生はわたくしのごとき後輩の愚見にも、眞面目に耳を傾けて下さり、あるときなど先生と話し合つた翌朝、「測定と比較との關係は結局かう考へてよいとおもふが、君の意見はどうか」といつて先生の論旨を要約した紙片を女中さんに託して送つて下さつたのには全く恐縮した。先生は短文一つ書くのにも極めて慎重で手堅く、興にまかせて書きとばすといふやうな適當の到底できない人であつた。



反対意見をも含めて考へられるだけは考へ抜いた上で、筆をとるといふ趣きがあつた。さうして先生は、自分の書いたものに對して、單なるお世辭ではなく、賛否ともにまじめな批評を受けることを希望しておられた。先生はあるとき「著書を寄附しても殆ど誰も読んでくれない。たゞ〇君だけは自分の書いたものを讀んで批評してくれる。〇君は自分と意見は違ふが、この點は有難いとおもつてゐる」と話されたことがある。〇君といふのはこんど大學へ復歸されたり先生のことである。わたくしはこの話をきいて、〇先生の心情を床しいものにおもつた。先生を眞に理解するものは、案外専攻をひとしくするいはゆる「弟子」どもではなく、かへつておもはぬ方面にあるかも知れないのである。

先生が貨幣金融の領域に閉ぢこもつてその外に一步も出られなかつたことは、おそらく先生と同時代の學者にあつては異例に屬するであらう。先生が啓蒙としてではなくむしろ *propaganda* として終始されたことは、先生の生活に外面的な華やかさや大衆的な人氣を與へなかつたけれども、學者としてはやはり立派な、清福な生き方であつたとおもふ。たとへば先生と對蹠的な福田博士をとつてみると、福田博士はなるほど、「廣嚴な分野にわたる問題の問題性を一々語ることに於て最も卓越した學者であり、のみならず自他の研究を鼓舞することにおいては空前絶後の教師であつた」(大熊信行氏)かも知れない。この點については山崎先生が福田博士の比ではないことは明かである。しかし福田博士のあの著大な全集と山崎先生の數冊の著書とのいづれが學問的價值において永續性を有するかは違かに決定しがたい問題であらう。山崎先生がかつて一度もジャーナリズムの世界に足を踏み入れられなかつたことは、もちろん先生の學者としての價值にいさゝかも影響するものではない。

しかし先生の専門の領域においても、先生の關心には時代的制約ともいふべきものがあつた。先生は貨幣の本質、機能、循環、および制度といふことと貨幣論グローバルの問題に關してはいふまでもなくよく考へておられたが、貨幣

と國民經濟全體の動きに結びつけてその作用を説明することは先生の視野の中になかつたやうである。先生には信用創造と景氣變動との關係といふやうな問題をとりあげる興味はなかつたとおもはれし、ましてケインズ以後の新しい貨幣論の動向に十分の理解をもつておられるやうには見えなかつた。ケインズの著作の中では「貨幣改革論」を一番愛讀してゐる、といふ先生の言葉は先生の關心がどの邊にあつたかを示すものであらう。先生がケインズの「貨幣論」や「一般理論」に對して何事も語らうとせられなかつたのは、一つには先生の慎重さから來てゐるが、一つにはこれらの書物の内容がいはいゆる貨幣論ではなくしてむしろ「產出量の分析」(*Analysis of Output*)であること、したがつて先生自ら限定せられた専攻領域から逸脱することを、無意識のうちに感得せられてゐたからであるかも知れない。

わたくしが先生によくお目にかゝつた頃は、我が國の經濟學が戦争の影響を受けて荒廢を極めてゐる頃であつた。先生は當時の日本經濟學や政治經濟學の主張には多大の疑念を抱いておられた。先生の性格よりしてかういふ疑念をむきだしに表明せられることは殆どなかつたけれども、先生の御氣持はよく察知できたやうにおもふ。當時たゞひとり孤獨の途を歩み、ときに自己と外界との間に越え難い深淵を見出して落葉の情に耐えかねたわたくしは、先生の前で當時の學界を罵倒する非禮を敢てしたが、先生は別に氣を悪くせずわたくしの亂暴な言葉に耳を傾けて下さつたことをいまでも有難いことと感謝してゐる。戦争の前途についても先生は、内心大に憂慮されてゐたのではないかと想像する。

わたくしが東京を去つて仙臺へ移つたのは昭和十九年の九月であるから、先生にお目にかゝつたのは出發前に御挨拶に行つたのが最後である。その後先生が千葉へ疎開せられたことは知つてゐたが、千葉から最初にして最後のお便りをいただいたのは妻がなくなつたときの御悔み狀であつた。このお便りは眞情のこもつたものであつて、今でも大



切に保存してゐる。去年の秋に久し振りで上京した際、舊居のあたりがどのやうに變つてしまつたかを知りたくて駒込から小石川原町の方へ歩いていつたことがある。變りはてな舊居の前に立つたとき、こゝで暮してゐた日にはあのやうに元氣であつた妻とあのやうに親しくしていたといふ山崎先生とが一人ともすでに故人であることをはつきりと意識して、わたくしは心に疼くやうな痛みを覺え、東京時代の生活がもはや過ぎ去つた夢であることを感ぜずにはゐられなかつた。そのときわたくしの腦裡には、妻のイメージに重なり合ふやうに山崎先生のイメージが映つた。炯々たる眼光、血色のよい顔、古風な外套を着てステッキをつきながらゆつくりと歩いてゆかれる後姿。すでに功成り名遂げた先生ではあつたが、いまだしく生きてゐて下されば、お別れして以來のお互の苦勞とありし日の思出とを語り合ふことができるのにと、このときほど先生のあの淡々たるうちにも情味のある風事をなつかしがつたことはない。